

41611

教科書文庫

4
810
41-1906
00030/809

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

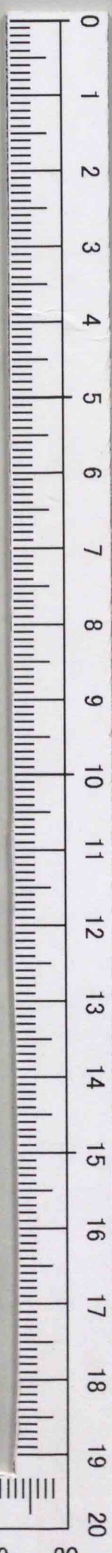
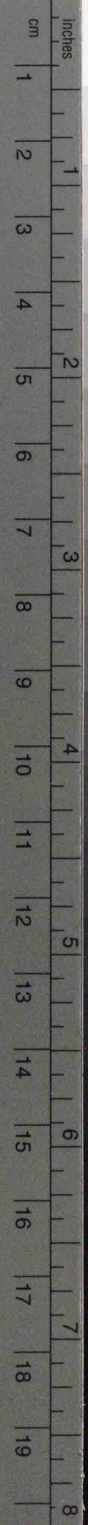


© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak

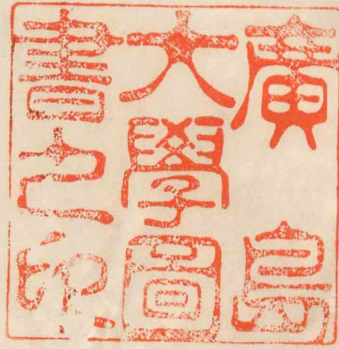


375.9  
Dc8  
資料室

訂海中等國語讀本  
落合直文編  
卷八



375.9  
008



再訂中等國語讀本卷八目次

一、	宇治河の先陣その一	一
二、	宇治河の先陣その二	九
三、	月夜返子より友人に寄する書	一七
四、	平家の都落	二三
五、	舊都の月	二五
六、	源平二氏の衰運	三〇
七、	美術の保護その一	三三
八、	美術の保護その二	三八
九、	靈ある鑿(新體詩)	四二

一〇、	ヒマラヤ紀行その一	四四
一一、	ヒマラヤ紀行その二	五一
一二、	地勢と國民の性格その一	五六
一三、	地勢と國民の性格その二	六三
一四、	平泉	六九
一五、	荒野の末(短歌)	七二
一六、	そゞろごとと五篇	七四
一、	雪の朝	七四
二、	青き眼	七四
三、	過ぎにし方	七五
四、	賤しげなる物	七六
五、	見ぬ世の友	七七

一七、	文話一則	七七
一八、	白石と宣長	八二
一九、	文學の價值	八九
二〇、	海と日本文學その一	九三
二一、	海と日本文學その二	九七
二二、	海と日本文學その三	一〇〇
二三、	河流	一〇四
一、	上流	一〇四
二、	中流	一〇六
三、	下流	一〇七
二四、	菜の花(俳句)	一〇九
二五、	清盛入道	一一〇

二六、 人臣の道…………… 一一五

二七、 大塔宮熊野落…………… 一二二

二八、 國家國體政體及び憲法…………… 一三〇

卷八目次終



再訂中等國語讀本卷八

一、 宇治河の先陣その一

折節、關東にはと披露しけるは、院は、去年十一月一日、西國へ、御門出と聞えたり。これは、木曾義仲、都にて、狼藉、斜ならず、人民、牢籠して、貴賤、やすきことなし。平家は、官位高く、太政大臣、左右の大將にあがり、顯官顯職して、卿相雲客に列りき。ただ、奢れるばかりにこそありしかども、さすが、君臣上下の誼を箴し、禮節仁義の法を篤うせりき。無下に、交代れとりしたる源氏なりけり。舊臣ゆかしとて、思し召し立つとぞ聞えけ

卿相雲客

箴し、禮節仁義の法を篤うせりき

無下に、交代れとりしたる

源氏なりけり

舊臣ゆかしとて

亂杖  
逆茂木

る。兵衛佐、大に驚き給へり。木曾と平家と、一つになり、九國、四國、南海、西海、與力同心せば、天下を鎮めむこと、容易かるべからず。まづ、義仲を追討して、逆鱗をやすめ奉り、その後、平家を亡すべしとて、六萬餘騎をさしのぼす。鎌倉殿の侍所にて、評定あり、合戦の習、敵に向ひ、城を落すは、案の内なり。大河を、前にあてたる兵を落さむこと、ゆゝしき大事なり。都に近き近江國には、勢多橋、その流の末に、山城國には、宇治橋、二つの難處あり。定めて、橋は引きぬらむ。河は深くして、流荒し。なべての馬の渡すべき河にあらず。その上、河中に、亂杖、逆茂木打ち、水の底に、大綱張り流しかけぬらむ。良馬どもを支度して、宇治、勢多を渡して、高名あるべしとぞ、議せられける。かゝりけ

れば、大名、小名、黨も、高家も、面々に、その用意あり。この内に、佐々木、梶原、馬に事をぞ闕きたりける。兵衛佐殿には、折節、秘藏の御馬、三匹あり。生暖、磨墨、若白毛とぞ申しける。

梶原源太景季、佐殿の御前に参りて、君も、御存知ある御事に候へども、弓矢執る身の、敵に向ふ習は、よき馬に過ぎたることなし。健馬に乗りぬれば、大河をも渡し、巖石をも落し、かくるも、引くも、たやすかるべし。力は、いかに、強くとも、心は、いかに、猛くとも、騎りたる馬、弱ければ、自然の犬死（生暖も初法）を怖れ、なき恥をも見ることに侍り。されば、生暖を下し預りて、今度、宇治河の先陣を勤めて、木曾殿を傾け奉り候はばやと、傍若無人に、憚るところなく、申したり。佐殿や、案じ給ひけるは、わ

も併列して、  
川下、  
下、  
中、  
上、  
止、  
法、

れ、土肥の杉山に、七人、隠れ居たりしに、梶原に助けられて、今世に出づる事も、忘れがたく思ふなり。賜ばばやと、覺しけるが、また、案じて、蒲冠者も、人してこそ、所望申しつれ。景季が、推參の所望、頗る、狼藉なり。また、これほどの大事に、馬に、事關けたりと申すを、たばでも、いがあるべきと、とかく、案じて、宣ひけるは、景季、たしかに承れ。この馬をば、大名、小名、八箇國の者ども、内外につけて、所望ありき。就中、大將軍に、差し遣す蒲冠者、眞平に、まかり預らむといひき。然れども、源平の合戦、いまだ、落居せず。木曾追討のため、東國の軍兵、大概、上洛す。知らず、平家と木曾と、一つになりて、大なる騒となりなば、頼朝もうち上らむ。その時の料にと思ひて、誰々にも賜ばざりき。こ

推參。オレも参らん  
 我、討つて  
 たば、わち、左、後、陪  
 討ル

れは、生暖にも相劣らずとて、磨墨を賜びにけり。

明日の辰の始に、近江國住人、佐々木四郎高綱、佐殿の館に早參して、所存ある體と覺えたり。兵衛佐、宣ひけるは、いかに、御邊は、この間は、近江に、在國と聞けば、志あらば、軍兵上洛に附きて、京へぞ上り給はむ。ずらむと、相存するに、いつ、下向ぞと、問ひ給ふ。高綱、申しけるは、その事に侍り。去年十月の頃より、江州、佐々木莊に、居住のところにかゝる騒動を承れば、誠に、近きにつきて、京へこそ打ち上るべきに、軍の習、命を、君に奉りて、戰場に出づる事なれば、再び、歸參すべしと存ずべきにあらず。今一度、見參にも入り、御暇をも申さむため、また、いづくの討手にむかへども、たしかの仰をも蒙らむ料に、正月

渡り  
れ、能性三  
ふ、過三、一  
も、三、三  
也、疑、三

五日の卯刻に、佐々木の館を打ち出で、三箇日の程に、鎌倉に下著し侍りき。且は、下向せずして、自由の京のほりも、その恐ありと存じ、かたがたの所存によりて、まかり下れり。志は、かやうに運びたれども、一匹持ち侍りたる馬は、馳せ損じぬ。親しき者といひ、知音と申す人々、面々に、打ち立つ間、誰に、馬一匹をも尋ね乞ふべしとも覺えねば、いかが仕り侍るべきと心勞して、大名、小名、既に、上りぬれども、今までは、かくて候ふなり」と申す。兵衛佐殿は聞きあへず、下向、今に始めざる志、神妙神妙。抑も、木曾朝威を輕んじ奉るによりて、追討のために、軍兵をさし上す。宇治、勢多の橋、定めて、引きて侍らむ。宇治河の先陣、渡されなむや」とありければ、高綱、申しけるは、近江の

殿家。

相心口傳

生立の者にて候へば、間近き宇治河、深さ、淺さ、淵瀬までも、委しく、存知仕つて候ふ。彼の手に向ひ候はば、宇治川の先陣は、高綱と申す。佐殿は、去ぬる治承四年八月下旬の頃、石橋の合戦に、大庭三郎に追ひ落され、遁れ難かりしに、殿原兄弟、返り合はせて、禦矢射て、頼朝が命を助けられき。その時は、日本半分どこそ思ひしかども、世、いまだ、落居せず、さしたる事なし。相構へて、今度、宇治河の先陣勤めて、高名し給へ。必ず、相計ふべきなり。頼朝、隨分、秘藏の生暖、御邊に預け奉ると、直に、仰を蒙る。高綱は、今生の大御恩、希代の面目、家門の勝事、何事か、これに如くべきと思ひければ、畏り入りて、馬を賜りて、出でむとするところに、佐殿、宣ひけるは、この馬、所望の人、あまた、あ

りつる中に、舍弟蒲冠者も申しき。殊に梶原源太、直參して、眞平に、申しつれども、若しもの事あらば、騎りて、出てむずればとて、賜ばざりき。その旨を存ぜられよ」と仰せければ、高綱、聊かも、そゝるか、座席になほりて、畏り、宇治河の先陣、勿論に候ふ。高綱、若し、軍以前に死すと聞し召さば、先陣は、はや、人に渡されけりと思し召さるべし、軍場にて、存命と聞し召さば、宇治河の先陣、高綱、渡しけりと思し召されよ。もし、他人に、先をかけられて、本意を遂げずば、敵は、嫌ふまじ、河端にても、河中にても、引き組んで、落し、勝負を決すべし」と申し定めて、出でにけり。

二、宇治河の先陣その二

元暦元年正月廿日、大手、搦手、宇治、勢多に著く。九郎義經、河端に推し寄せ、見給へば、橋板を破り取りて、向の岸に、垣楯に搔き、櫓に構へたり。水は、深さ、増して、底見えす。その上、亂杖、逆茂木、隙なく、打ちて、大綱、小綱、引き張りて、流し懸けたれば、鶯鴨などの水鳥も、たやすく、潜り通るべしとも見えざりけり。河の耳、分内狭くして、打ち臨みたるもの、四五千騎には過ぎず。二萬餘騎は、寄り附くべきところなくして、たゞ、徒に、後陣に控へたり。河のさまをも見ず、橋を引きたるも知らぬもののみ多ければ、渡るべき評定にも及ばざりけり。御曹子は、雑色、歩走の者どもを集めて、家々の資財、雑具、一々、取りいださ

雑色  
歩走



せて、河端の在家を悉く、焼き拂ひ、大勢を、一所に集むべし」と、下知し給ふ。このよし、走せ散りて、のゝしりけれども、かねて、山林に逃げ隠れたりければ、家々には、人もなし。この上はと、手々に、續松を指し上げて、宇治の在家を焼き拂ふ。行歩にかなはぬ老者、少者ども、さりとも、忍び居たりけれども、猛火に焼け死に、たまたま、遁れ出でたれども、馬人に踏み殺さる。まして、牛馬の類は助くる者もなければ、その數を知らず、焼け死にけり。風吹けば、木、安からずとは、かやうの事なるべし。廣々と、焼き拂ひたりければ、二萬五千餘騎のこる者もなく、河の耳に臨みたり。

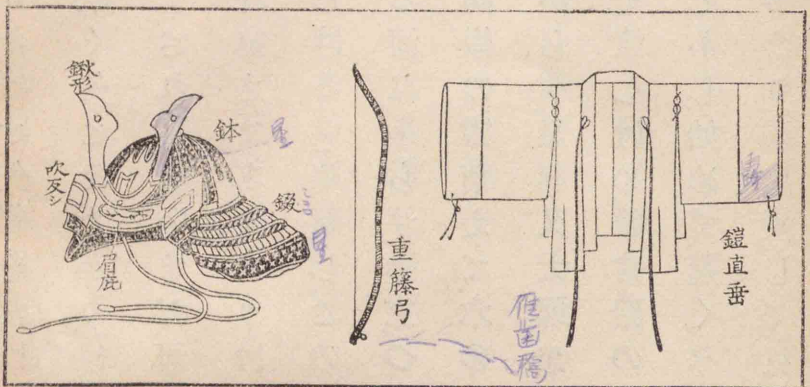
御曹子、河の邊近く、高櫓を造らせて、この上に登りて、四方

を下知し給ひけり。矢立の硯を取り寄せて、宇治河先陣と剛の者どを、次第、明々に、注して、鎌倉殿へ、見參に入るべし」と、仰せられければ、軍兵、各、勇をなして、忠を抽でむとぞ、色めきける。御曹子は、櫓の上にて、さまざまの事、下知し給ひけれども、大勢、思ひ思ひに、とゞめきければ、うち紛れて、聞えざりければ、平等院の御堂より、太鼓を取り寄せ、櫓の上にて、打ちければ、大勢、靜りて、何事やらむと、鳴をまづめて、軍將に、目を懸くる時、大音揚げて、下知し給ひけるは、二萬五千餘騎の勢の中に、海の邊、川端に住みて、水練の輩多かるらむ。耶等、家子、舎人、雜色までも、かゝる時こそ、群に抜けたる高名をもすれ、我と思はむ者どもは、物、具ぬぎ置きて、瀬踏して、川の案内を試み

るべし。向の岸を見るに、矢筈を取りたるもの、四五百騎と見えたり。瀨踏するものあらば、定めて、引き取り、引き取り、射むずらむ。剛座に著かむと思はむ人々は、馬を捨て、橋桁を渡り、向の岸の軍兵を追ひ拂ひて、水練の輩を、思ふ様に、振舞はせよと、下知せられければ、これを聞き、平山、馬より飛び下り、橋桁の上に入り、走り登り、弓杖を突き、扇はらはらと、使引て、申しけるは、「二萬五千餘騎のその中に、橋桁先陣の渡は、武藏國住人平山武者所季重といふ小冠者なり」とぞ、名告りける。抑も、當河の有様、深淵潭々として、巨海の波に浮べるが如し。下流、森森として、瀧水の漲り落つるに、臨むに似たり。虹の橋桁、危うして、雁齒の構、奇しければ、渡り得むこと難けれども、軍將の

剛座  
橋桁より下へ張  
薄き草も

深淵  
潭々



下知を背くは、命を惜むに似たり。身をば、宇治河の底に沈むとも、名をば、後代の末にながさむとて、平山、これを渡る所に、佐々木太郎定綱、澁谷右馬允重助、熊谷次郎直實、子息直家、已止五人ぞ、續きて、渡しける。矢ごろも、近くなりければ、向の岸の軍兵、弓を強く、挽かむがために、わざと、兜を脱ぎて、思ひ思ひに、ひき取り、ひき取り、放ちける。矢、雨の脚の如くに、飛びきたりけれども、甲冑をゆり合はせ、ゆ

盾底

ヤ  
矢間  
左ばいこり保復  
した

り合はせ、矢間をたばひて、振舞へば、鎧は、重代の重寶なり、裏  
缺く矢こそなかりけれ。

されども、いまだ、河を渡すものはなし。いかがあるべきと、  
評定さまさまなりけるに、畠山庄司次郎重忠、進み出でて、申  
しけるは、事新し。この河は、近江の湖の末、今、始めて、出てきた  
る河にあらず。春立つ日影の習にて、細谷川の氷解け、比良の  
高嶺の雪消えて、水のかさは増すとも、水の減ることあるべ  
からず。足利又太郎忠綱も、高倉宮の御軍の御時は、渡せばこ  
そ渡しけめ。鎌倉殿の御前にて、さしも、評定のありしは、これ  
ぞかし。始めて、驚くべき事にあらず。かねての馬の用意、その  
事なり。重忠、渡して、見參に入れむと、いふ所に、平等院の小嶋

鎌鐔こま（つばき）

廿四復輪

が崎より、武者二騎、驅け出でたり。梶原源太と佐々木四郎な  
り。景季が装束には、木蘭地の直垂に、黒草威の鎧に、三枚兜の  
緒をしめ、滋藤の弓の中を執り、二十四さしたる小中黒の矢  
負ひ、鎌鐔の太刀佩いて、鎌倉殿の賜びたる磨墨といふ名馬  
に、黒塗の鞍置きて、騎つたり。高綱は、褐の直垂に、小櫻を、黄に  
反したる鎧に、鉄形打ちたる兜に、笛籐の弓の真中を執り、二  
十四さしたる石打の征矢、頭高に負ひ、嗔物造の太刀佩いて、  
これも、鎌倉殿より賜びたる生暖に、黄覆輪の鞍置きて、ぞ騎  
つたりける。誰か先陣と見るところに、源太、さつと、打ち入り  
て、遂に、先立ちけり。高綱、いひけるは、いかに、源太殿、御邊と高  
綱との外に、人なければ、かく申す。殿の馬の腹帯はらびは、以の外に、

ゆるびて見ゆるものかな。この河は、大事の渡なり、河中にて、鞍踏み反して、敵に笑はれ給ふなど、いひければ、さもあらむと思ひて、馬を留め、鐙踏ん張り、立ち上り、弓の弦を、口にくはへ、腹帯を解きて、引き詰め、引き詰め、止めける間に、高綱、さつと、打ち渡して、二段ばかり、先立ちたり。源太、たばかられけりと、安からず、思ひて、これも、打ち浸して、渡りけるが、馬の足、綱にかゝりて、思ふ様にも、渡されず。高綱は、究竟の逸物に、騎りたれば、宇治河はやしと雖も、淵瀬をいはず、さゝめかして、曲に渡し、向の岸近くなりて、生暖、綱に懸りて、足を、さと、歩み除けければ、固より、期するところとて、太刀を抜き、大綱、小綱、三筋、さと、切り流し、向の岸へ、打ち上り、鐙踏ん張り、弓杖突いて、

究竟。……  
極りたんこト

「佐々木四郎高綱、宇治河の先陣渡したりや」と、名告りも果てぬに、梶原源太も、流渡に、上りにけり。(源平盛衰記)

三、月夜逗子より友人に寄する書

いつの間にやら、秋風、身にまむ頃と相成り候ふ。憂なきこの心は、物の悲しさを覺えず、れもしろく、うれしく、楽しく、くらし居り候ふ。

この八月二十六日は、舊曆の七月既望に當りたれば、晚餐の箸を投じ、大なる麥藁帽を戴き、悠々然として、逗子の濱邊を過ぎ、養神亭なる、友人の寓を訪れ候ふ。かくて、あひたづさへて、三崎街道に沿ひ、鐙撮山にいたり

既望。

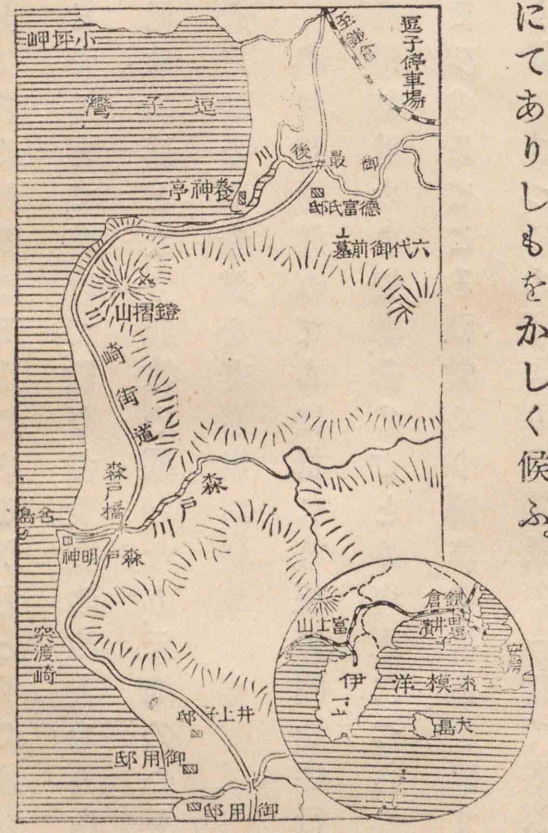
口碑をモッテ

候ふ。この山は、頼朝が三浦出遊の時、こゝにて、鐙を揚りしゆゑに、かく、名づけたりと、口碑に存し居り候ふ。三浦義盛、島山重忠と、合戦の時、こゝに、陣を取りしよし、源平盛衰記に見え候ふ。

文明の恩澤は、この山の絶壁を切り下げ、海に沿うて、馬車をも馳せ得べき、大道を開き候ふ。位置は、小高くして、海上に斗出し、逗子灣を隔てて、小坪岬と相對し、恰當の觀月臺に候ふ。やがて、月は、鐙揚山の背より出でくれば、海上蒼茫として、たゞ、こゝかしこに、月影の反射を見るのみ。當面の富嶽は、雪舟の描ける淡墨畫の如く、恍惚として、まことに、夢の如くに候ふ。不思議なるかな、かねて、見れば、えもなき奇峰、突兀とし

恰當に見ゴロ

えーる(靴)



て、富嶽の周圍に立ち竝ぶ。こは、上州なる妙義山の飛び來れるにか、さても、れもしろきことよと、篤と吟味致しつれば、雲にてありしもをかしく候ふ。

われらの帽簷にきしり上り候ふ。清光は、限なく、相模洋より、

われら二人  
は、興に乗じ、聯  
歩快談はやく  
も、天地深寂た  
る、森戸川の橋  
上にいたり候  
ふ。月は、まさに、

伊豆の嶋々を照し候ふ。海上に天あり。天上に海あり。月は海上にあるか。波は天上にあるか。月と共に、涌きくる高潮は、寄せて捲きて、碎けて、散りて、黄金の波となり、白金の浪となり、眞珠の濤となり、錦繡の瀾となり。天地の心をいひやぶる、雄大玄深なる音楽を奏し候ふ。

森戸川を渡りて、右に折れ、亂松の間を蛇行すれば、やがて、森戸神社なり。松林帯のごとく、海上につらなり、林盡きて、巖そびゆるどころ、祠堂あり。幾多の巉巖を隔てて、名嶋と相對し候ふ。まづ、このもよりの絶景の一にて候ふ。東鑑を按ずるに、元暦元年五月十九日、武衛道遙、海濱給、自由比浦御乗船、令著、杜戸岸給、御家人等、面々、飭舟船、各取、棹、爭、前途、其儀殊、有興

東鑑(在書體)  
武衛ト日本兵衛  
即武衛頼朝ト指

想ふハ想像を以テ  
境ハ過去ヲ思フ

也。於、杜戸、松樹、下、有、小笠懸、是、士風也。見え候ふ。かれを想ひ、これを憶りて、いと、昔の人の志のばれ申し候ふ。今、人、不見、古時、月、今、月、却、經、照、古人。古人のなつかしきにつけても、また、行末、いかなる人をば照すらむなど思ひつゝ、歩行致すほどに、いつしか、突渡崎にさしかゝり候ふ。これよりは、井上梧蔭先生の別墅も、ほど近し、ついでなれば、門を敲くも、一興ならむとて、捷路を取りて、濱邊に下り行き候ふ。

月は、ますます、冴えて、潮は、いよいよ高く、ことに、この邊は、奇礁、狂巖、亂立したれば、濤聲、凄じきばかりに候ふ。ふと、見れば、あなたの巖上に、大なる鷺の如きもの、たゞずみ居り候ふ。近づけば、人なり。さらに、近づけば、思ひきや、梧蔭先生ならむ

とは。

かくて、先生に導かれて、濱邊の裏門より入り、榻を庭除に移し、婆娑たる、松間の月影を眺めつゝ、江湖の漫談にうち興じ、ねほえず、時刻を移し候ふうち、生憎や、怪雲、月を掠め來り候ふ。いざ、さらばと辭して、濱邊に出づれば、黒紗の如き雲の絶間より、月こそあらはれて候へ。

三五の村舎、今は、死よりも靜に、眠り候ふ。ひやゝかなる風は、そよそよと、御最後川の汀に叢生したる蘆洲を吹き渡りて、髪ともなく、額ともなく、頬ともなく、嘗め候ふ。暗淡たる雲に彩色せられたる月光は、青白く、六代御前の森の上にかゝり候ふ。御最後川の橋上より眺むれば、かすかなる火光、一つ

めざまし  
思ひの外

墨股地帯  
もろくも潰えてし  
甲斐す破し

二つ、これ、漁燈か、これ、鬼火か、存じ申さず候ふ。宿に歸りて、戸を敲くをりしも、雨點兩三、はらはらと、帽上に零ち候ふ。草々不宣。徳富猪一郎

#### 四、平家の都落

れよそ、世に、傳へ遺されたる歴史は多かれど、平家の都落ばかり、哀にも、また、めざましきはなかるべし。南都の餘燼、いまだ、さめず、墨股の勝鬨、なほ、響きぬるに、信越、俄に、雲亂れて、木曾の五萬騎、はや、比叡のあなたに、充ち満ちぬ。宇治、淀の備もろくも、潰えて、都も、今を限とぞ見えし。あはれ、一門の天下、身を置くに處なし。世は、かく、憂きを、み吉野の山のあなたに

ふらふらは(感動)  
自ら思ひこころん時を後  
スル威勅詞  
AI、イソノミト。

あわをい(世情)  
周章(慌)  
混雜

も、かくれがは無きか。いざさらば、やみなむ。都の中にて、いかにもならむよりは、西國の行幸に御供して、一旦の凌辱を忍ばまし。あはれ、生死も知らぬこの別路、再び、歸り來べき都ならねばとて、六波羅、池殿、西八條以下、一門譜第の邸宅宿房、京白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし果てぬることあわたしかりしか。

こゝに、鳳闕の礎、空しく残り、椒房の嵐、夜々、かなしむ。保元このかた、天下の榮華をつくしたる、花の都を、燒野の原と顧みて、末は、煙の浪、雲の浪、行方も知らず、さすらふらむ。直衣束帶の身にも、今は、黒金の衣をつけたれど、詠歌の餘哀に、狙れて、弓矢の響を勵まむ心ちせず。さても、棄て難き命や。今こそ

翠華搖々

端

は、うき世なれ。さすがに、志のばるゝ昔の様の夢に入るをば、いかにかせむ。翠華、搖々として、西に向へば、秋風到る處に、野に満てり。嗚呼、きのふは、東關のもとに、轡をならべて、十萬餘騎、けふは、西海の波に、纜を解きて、七千餘人、行方の空は、わかねども、身に志む秋は、欺かれず、渚に寄する波の音、袂にやどる月の影、すべて、心を傷ましむるもののみなり。月の出でくる山のはを、あなたの空とや思ひけむ。日暮、舳に立ちて、笛吹く人あり。響は、遠く、煙波をかすめて、三軍、ひとしく、耳を欽つ。嗚呼、この時、この人の懐、果して、如何。高山林次郎著橋牛全集

五、舊都の月



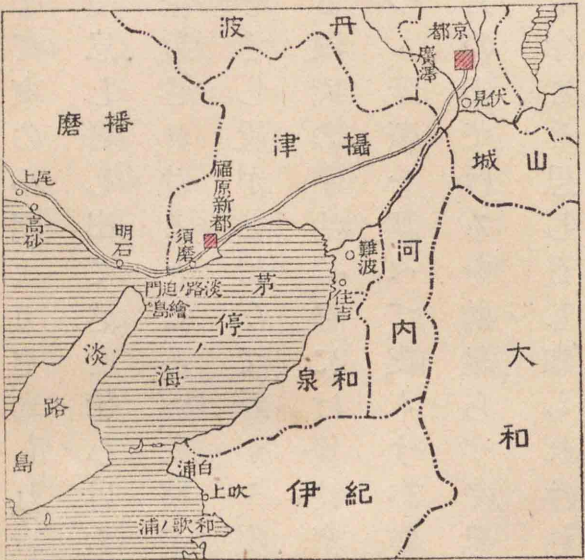
六月九日の日、新都の事始、八月十日の日、上棟、十一月十三日、遷幸と定めらる。舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す、あさましかりつる夏も暮れて、秋にも、既に、なりにけり。秋も、やうやう、半になり行けば、福原の新都にましましける人々、名所の月を見むとて、或は、源氏の大將の昔の蹤を志のびつ、須磨より、明石の浦づたひ、淡路の迫門をれし渡り、繪嶋が磯の月を見る。或は、白浦、吹上、和歌の浦、住吉、難波、高砂、尾上の月の曙を眺めて、歸る人もあり。舊都に残る人々は、伏見、廣澤の月を見る。中にも、徳大寺の左大將實定の卿は、舊き都の月を戀ひつ、八月十日あまりに、福原よりぞ上り給ふ。

何事も、皆、變りはてて、稀に、残る家は、門前、草、深くして、庭上、

あさましかりつる  
心を得るを  
夏も暮れて  
秋もやうやう  
半になり

隨身  
大將、八人、侍  
人

露、滋し。蓬が袖、淺茅が原、鳥のふしどと荒れ果てて、蟲の聲々怨みつ、黄菊紫蘭の野邊とぞなりにける。今、故郷の名残と



殿の御のぼり候ふと、申す。さはべらば、惣門は、錠のさゝれて

ては、近衛が原の大宮ばかりぞましましける。大將、その御所へまゐり、まづ、隨身を以て、惣門を敲かせらるれば、内より、女房の聲にて、「誰そや、蓬生の露、うち拂ふ人も無きところ」と、咎むれば、これは、福原より、大將

候ふぞ。東の小門より入らせ給へ」と申しければ、大將「さらば」とて、東の小門よりぞ参られける。大宮は、御つれづれに、昔をや思し召し出でさせ給ひけむ。南面の御格子上げさせ、御琵琶遊されけるところへ、大將つと、参られたれば、暫く、御琵琶をさし置かせ給ひて、「夢かや、現か。これへ、これへ」とぞ、仰せける。源氏の宇治の巻には、優婆塞の宮の御女、秋の名残を惜みつゝ、琵琶を調べて、夜もすがら、心をすまし給ひしに、有明の月の出でけるを、猶、足らずや思しけむ。撥にて、招き給ひけむも、今こそ思し召し知られけれ。

小侍従と申す女房も、この御所にぞ侍はれける。大將、この女房を呼び出でて、昔今の物語ども志給ひて後、小夜も、やう

優婆塞(佛)の御女  
多し男子、  
優婆塞(女) 女子中夜

やう、更け行けば、ふるき都の荒れゆくを、今様にこそ謠はれけれ。

ふるきみやこを、 きて見れば、

あさぢが原とぞ、 なりにける。

月のひかりは、 くまなくて、

あきかぜのみぞ、 身には志む。

ど、れしかへし、れしかへし、三反、うたひすまされたりければ、大宮をはじめ奉りて、御所中の女房たち、皆、袖をぞ沾らされる。さる程に、夜も、やうやう、明け行けば、大將、いとま申しつづ、福原へぞ歸られける。(平家物語)

今様。唐世風  
今様歌。  
七音、五音、二、八、句  
或、十、句、歌、ヤ、マ、カ、

六、源平二氏の衰運

源平の世は、あはせて五十四年、興亡の迹、大かた、一樣にして、ことに、平氏の滅亡は、藤氏失權の面影にも似たり。

平氏は、はじめ、源氏とれなじく、武人の長となりて、北面に候したりしに、保元、平治の戦功を経て、藤氏に代り、政權を掌握せしかば、とみに、上臈となりて、武人の性質をかへ、刀を棄てて、笏を執り、甲冑を脱ぎて、長裾を曳き、齒を染め、黛をゑがき、詠歌に耽り、音樂を好みしほどに、櫻花を挿して、青海波を舞へば、人みな、その風流閑雅に感じ、拍手喝采して、梅櫻少將と呼びなしたるもありき。

されば、烏帽子の矯めやうも、一種、六波羅の新様をいだし、て、四季の御所には、雪月花の宴をひらき、一門の榮華には、三十餘州の膏血を絞り、平氏にあらざれば、人にあらずと驕りて、武人を輕んじ、武士を卑め、宮人は、宮人どちと、樂器を、戰場にも攜へ、短冊を、鎧の袖にも挿みて、詩歌管絃の遊は、陣中にもやめざりし間、喊聲、天に震ひ、人馬、狂奔して、一谷の城、みすみす、陥るにも、城中、悠然として、音樂を奏しつゝ、敵をも、既に、泣かしめたれば、味方にも、泣くものあるべく、平氏を仰ぐ武士、漸く、滅りて、東北は、悉く、叛き、西南にも、叛者、出て來れども、上臈は、于戈に慣れねば、維盛は、戦はずして、奔り、宗盛も、沈まずして、虜となり、仁安よりこなた、二十年の榮華、遂に、重盛が、一睡の夢となりて、源氏一統の世とはなりにしが、源氏も

上臈の藤氏を穢しん人(佛指)ニ位以上典侍ヲ云フ

また平氏の如く、頼朝は武人にして興り、實朝は上臈にして亡びぬ。

そもそも當時は、武人の世にして、武人を治むる、やがて、世を治むるなれば、武人の心を獲るもの、政權をも得ぬべきは、當然の理にて、武人を治め、政權を執るも、必ずしも、源平二氏に限るにあらざれば、頼朝は、高位高官を貪らず、つとめて、武人の心を攬りて、武人と共に、進退せしが、實朝にいたりては、また、藤氏の宮人にならひ、平氏の公卿をまなびつゝ、朝夕の遊には、鞠を蹴、歌を詠み、かたへは、佛説にまどはされて、世務をもかへりみざりしほどに、いつしか、政權、退轉して、頼朝が平氏の後を相續せし以來、三十五年を経て、遂に、また、北條氏

に移れり。物集高見著日本文明史略

### 七、美術の保護その一

蒼々たるかの天、漠々たるこの土、その間、國を建つるもの、いくばくぞ、東(あづま)に、睥睨するものあり、西に、窺竅するものあり、南に、北に、前に、後に、互に備へ、互に窺ふ、既に、國を、この間に建つるもの、よろしく、その兵を強くし、その富をにぎはし、退きては、百萬の敵軍、海を蔽うて、來るとも、守護するに足るべく、進みては、懸軍萬里、異疆絶域にのぞむとも、勝を制するに足るべく、去かして、この帝國のうち、家、足り、人、給し、貿易、製造の道、日に、開通することを圖らざるべからず、されど、これ、いま

萬里懸軍、異疆絶域、  
を備へて、  
を給し、  
を製造す

采手。面影。  
景仰 糖膏所  
追慕。

だ、國家の品位をたかむる所以にあらず。國家の品位をたかむる方策は、如何いかにか。  
それ、いにしへより傳來せる、巧工の品物にして、よく大に、よく雄に、よく高に、よく壯に、よく精に、よく麗に、以て、一國々民の趣味を知るに足り、以て、一國々民の采手を伺ふに足り、觀るものをして、景仰追慕の情に堪へざらしめ、聽くものをして、敬肅謹恪の心を生ぜしむるものは、即ち、所謂、美術品なり。故に、彼の建築、彼の彫刻、彼の繪畫、一面は、これが保存にため、一面は、これが振興につくさざるべからず。もし、美術品の保存と振興とをして、そのよろしきを得しめ、外國人をして、ますます、敬仰するところあらしめば、その、わが品位をた

かむること、果して、いかにぞや。誰か、美術問題を目して、閑人の閑問題となすものぞ。

わが帝國の美術たる、まことに、わが帝國歴史の一要素を組成するものにして、その繪畫、その彫刻、その建築、たとひ、幾分を、支那、天竺、三韓等の典型に學び、構造にならひたりとせむも、その、我に入る事の久しき、遂に、この風土、この民心と同一化し、形を變じ、勢を變じ、今は、まことに、國民の趣味、采手をあらはす、唯一の要具とはなれり。

顧ふに、藤原、源平の時代、北條、足利の時代、豊臣、徳川の時代、そのよりより、名工、妙手、續々、出でたりき。その殺伐的の時代にありては、堅牢無雙なる城廓のごとき、建築美術れこり、兜

よりのより  
なり、なり

のごとき、鐙のごとき、鐔のごとき、目貫のごとき、精緻高妙なる彫刻美術れこれり。その、佛教隆盛の時代にありては、大伽藍、大堂塔のごとき建築美術れこり、阿彌陀佛、毘盧遮那佛のごとき、最妙最巧なる繪畫美術れこれり。かくて、その建築、彫刻、繪畫などを見るに、一方は、亂世の相をあらけし、一方は、昌平の相をあらはせり。これらは、當時の世態人情を、つまびらかにするを得るのみならず、彼の、狷介不羈なる美術家が、眼一世に超絶し、時と合はず、人と合はず、慨然、流俗中に奮ひて、巧品を製出したるも知らるべく、彼の、豪邁逸宕なる美術家が、精神、飄乎として、天外に高踏し、こゝに、大美術品を製出したるも知らるべく、彼の、無我無欲なる美術家が、山に、水に、月

狷介不羈。  
狷介と堅確を併置し、  
見そ、人々皆ん、  
狷介と云ふ  
不羈と俗衆と卓絶  
しんんを云ふ。

に、花に、竹に、草木に、鳥に、猿に、犬に、蝶に、人に、雲雨に、風火に、その自然を描出したるも知らるゝに、あらずや。誰か、いふ、われらに、ミケランジェロなしと、また、ラファエロなしと。こは、皆、精査、檢覈せざる罪のみ。

檢覈。カキ。ル。モ。チ。ホ。フ。

西敷ト、事實ヲ、  
考シテ、明カニ、  
云フ。

前代に、れける、わが美術は、まさに、かくの如きものあり。しかして、維新のはじめ、社會風潮の一變するや、破壊の氣風、四方に、れこり、人々、徒に、小利小智に、流れ、美術のごときは、贅澤なりと、唱ふるに至れり。たまたま、有識の士ありて、その不可なるを、説けど、なほ、いまだ、勢力なく、美術の前途、うたゝ、憂ふるに、堪へざるものあり。

## 八、美術の保護その二

顧へば、古昔、王朝の盛なりし、寧樂、平安の都は、まことに、わが美術の淵藪なりき。その堂塔伽藍は、高く、半空に聳えて、雲相迷ひ、木魚鐘聲、相應へて、竹林、鳥、おのづから閑に、その建築は、雄麗宏壯、古今に絶して、鬼泣き、神哭し、その藏むるところ、木像、金像、銅像のごとき、古佛像より、千種萬種の繪畫、こゝにあつまり、人をして、天上、常に、一色異彩の雲氣あるを疑はしめき。その他、鎌倉のごとき、平泉のごとき、もとより寧樂、平安と、同日の談にあらざれども、美術界の一方に雄視して、ながく、後世を照せり。さるに、今は、すなはち、如何、寒煙荒草、滿目蕭

條として、寺門破れ、屋瓦墜ち、彫刻、繪畫の絶美術は、雨露の漏るゝも、蟲鼠の害するも、これを憂ふるものなきにあらずや。古昔、雄都の址だに、かくの如し。況や、その他の保存の、完全ならざる、知るべきのみ。その甚しきに至りては、寺院の維持に窮して、千古絶調の寶物を、外人の手に賣却せしものすら、これあり。まして、一箇人の所藏などは、をしげもなく、海外に流出せしめたるもの、それ、いくばくぞや。今にして、はやく、これが計をなさずば、前途の事、知るべきのみ。

つらつら、現今の美術界を觀察するに、果して、これを振ふに足る人士あるか、余は實に、これを知らざるを愧づるなり。蓋し、大美術家は、百歳二百歳にして、僅に、一二人出づるもの

代々 代々重んずる  
世々

阿堵物<sup>アトモウ</sup> 金銭

にして、もとより、代々に求むべきものにあられざれども、その後塵だに望む能はざるにいたりては、また遺憾のかぎりにあらずや。今、これが原因をたづぬれば、美術家の、阿堵物に戀戀たるも、その一ならむ、小成に安んずるも、その一ならむ。その他、風潮の、然らしむるところもあらむ。需用僅少の致すところもあらむ。されど、その、最も、大なるは、振興、その法を得ざるにあらむ。

嗚呼、美術品の製作は、わが國民の持有の長技なり。特得の長所なり。山の光、水の影、氣候の調和、風の靜穩、もとより、これが冥助をなすならむも、また、先天の性質、既に、然るにあらざるなきを得むや。苟も、振興、そのよろしきを得ば、以て、わが國

民の品格をたかむることを得べきなり。その振興の方策は、如何。

抑も、わが美術品たる、ひとり、古來にれける、歴史の一要素たるのみならず、まことに、國家と、生命を、共にするものなり。その衰と盛とは、暗々裡に、國家品格の高低如何に關すとせば、これが振興の途、また、實に、國家全體の力を擧げて、これに當らざるべからず。余輩の考ふるところによれば、まづ、一大國立博物館を建て、一方には、寺社祠宇は、さらなり、一箇人所藏の古美術品までも、悉く、こゝにあつめ、以て、篤志家の參觀を許し、一方には、今人の製作にかゝる美術品を掲げ、以て、來者を勵すにあり。もし、それ、かくのごとくならば、一は、歴史の



參照となり、二は、古物の散佚を防ぎ、三は、後進美術家の典型となり、四は、全國民をして、美術の重んずべきを知らしめ、あはせて、高尚靜平の心氣を養はしむるに至らむ。果して、事ここに出でむか、あに、希臘、羅馬の古美術をして、美を前に、專にせしめむや。あに、凱旋門、頌德表をして、壯を、後に、擅にせしめむや。三宅雄次郎

九、靈ある鑿（藤村詩集）

磯の香たかし、瑞巖寺、  
冬道遙の、こゝろなく、  
さすや日の影、暖けき、

ふるき戸びらに、身をよせて、  
技巧いみじき、うき彫の、  
葡萄のうら葉、見てあれば、  
いまも垂るべし、つゆの玉、  
蔭に彫られし、栗鼠も、  
やがて跳りて、脱けいでむ、  
あゝ靈ある刀、くしき鑿、  
波にこたふる、いそ寺の、  
鐘にこの日は、暮れ行けど、  
なにと捧げむ、たゞへ言、  
ゆふ闇かけて、たゞずめば、

むかし戀しや、甚五郎。

一〇、ヒマラヤ紀行 その一

ヒマラヤの四十八大峰、その高さ、いづれも、わが富士山の二倍以上にあり。エベレストは、世界第一の高峰にて、直立二萬九千二呎、海拔五哩に達す。餘脈は、まばらく、これを措き、そのヒマラヤ本系と稱せらるゝもの、東西二千哩、印度大半島の北部を劃せる大障壁となりて、絶えず、印度洋面より吹き送る、熱帯の水蒸氣を、雪となし、雨となし、以て、ブラマプトラ、ガンガ、インドスの三大流を、その南側に吐き出す。世界最豊饒の平原、これがために生じ、世界最古の文明、これがために

起り、而して、世界第一の偉人、また、これがために生まれたり。千古萬古、依然たる壯容、幾多、下界の治亂興亡を下瞰して、今、なほ、世界の秘密國たる西藏を、背後に包擁す。その壯大雄宕、吾人の、殆ど、夢想する能はざるところなり。

明治三十三年一月廿四日、午後三時、汽車は、カルカッタ市を發し、同七時三十分、ガンガ河畔に著きぬ。河幅、三哩に及べり。五百噸の汽船を以て、汽車の貨物乗客を、對岸に輸送す。われは、獨、舷頭に立ちて、河上の夜景を貪り看る。

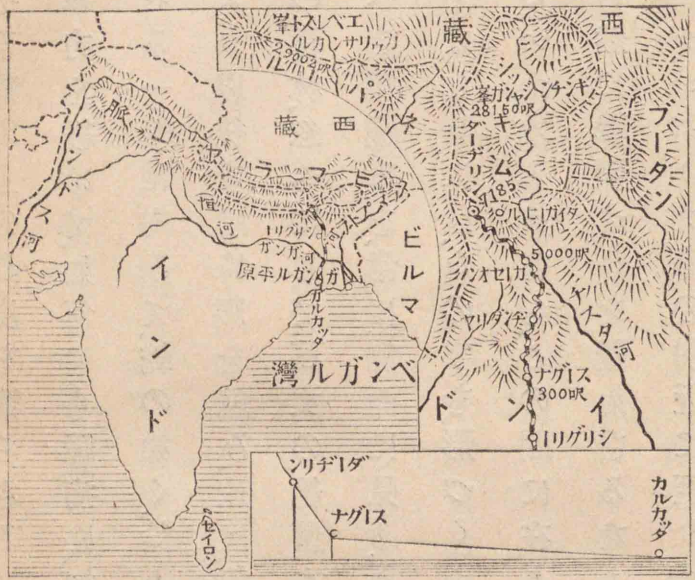
晚輝、已に、收り盡して、星光、水に落ち、樹木無く、岩石なく、只、灰の如き微塵砂より成れる兩岸は、模糊として、一線を描きぬ。生暖き風は、水面を拂うて、遠く、また、近く、亡國の恨を知ら

そゞろに(副詞)  
何故とナリ

ず顔なる、土人の蠻歌を送り來り、そゞろに、行客をして、悲愴の情懷に堪へざらしむ。

船を捨てて、睡眠客車に投じ、翌朝七時、シリグリー驛に達す。こゝにて、再び、汽車を乗り換ふ。これより以北を、ダージリン、ヒマラヤ鐵道と稱す。軌道の幅、纔に二呎、世界無比の小汽車にて、さながら、玩具のごとし。交通事業に熱心なる、かの英國政府が、幾多の歲月と、莫大なる工費とを費して、辛苦經營せる結果や、かくの如きを見れば、地の峻峻なること、推して、知るに足らむ。これより、ダージリンまで、僅に、五十一哩、一時間、十哩の速力を以て、連山重疊の間、毎時平均、一千尺づつの高度を上り行く。忽ち見る、ヒマラヤの一支、雪を戴いて、天空を

衝き、蜿蜒として、南に走るを、快甚し。



走ること七哩、スーグナ驛に達す。平原、茲に盡き、山勢突兀として、天を支ふる壁の如く、平原と、直角をなして、前方を塞ぐ。ベンガル灣頭より、この驛に至るまで三百哩、僅に、海拔三百呎を上りしに過ぎず。ダージリンまで、剩すところは、只、三十五哩にして、その間に、

七千呎以上の高度を攀ぢざるべからざるなり。汽車は、急に、速力を緩めて、如何にも臆病に、如何にも謹慎に、平原に直立せる一峰に向ひて、蛇の如く、徐々として、這ひあがり。これより以後、或は峰腰を縫ひ、或は巒巔に匍ひ、忽ちにして、千古の森林、忽ちにして、萬丈の絶壁、右に曲り、左に折れ、前にあるべき機關車を、常に、側面に見る。この間の線路、時には、Zの字をなし、時には、Oの字を、形づくり、Uとなり、Sとなり、Wとなる。いかなる旅客も、この間に在りては、心臓鼓動して、雙脚の、自然に、戰慄するを覺えざるなり。

チンダリア驛の附近に至れば、煩蒸の空氣は、頓に、一變して、清涼となり、外套、猶寒を訴ふ。植物も、熱帶のもの、漸く、盡き

浩茫  
ニ云フ字、  
ト云フ字、  
ト云フ字、  
ト云フ字、  
ト云フ字、

て、温帯の樹木となれり。十一時、カーセオンに著す。この驛、海面より五千呎、ヒマラヤ鐵道の中にて、眺望絶佳の地とす。仰げば、白皚々の連嶺、雲海に浮べる群嶋の如く、前面に列り、脚下には、雲のきれ目を透して、ベンガルの大平原、浩茫として、涯なく、ガンガの流、日光に映じて、細き銀線を敷きたるが如く、遠く、眼界の外に去るを見る。身は、恰も、輕氣球に乗じて、亞細亞大陸の中央に高翔せる想あり。午後三時、遂に、ダージリンに著す。

ダージリンは、人口一萬餘、西藏、ブータン、英領印度、ニポール等に接し、特に、西藏といふ、世界の秘密藏を開く、南方の關門なり。ヒマラヤ山脈中、第二の高峯、キンチンジャンガより、

直線四十五哩の距離にある、一山脈の半腹に位す。印度總督を始め、印度にある歐洲人が、唯一の避暑地なるを以て、人口年々に増加し行けり。

この地もと、シキム王國として、西藏の藩屏たりき、今より六十五年前、二人の白人、如何にも零落して、乞丐となりて、迷ひ來れるあり。土人は、彼等を憐み、厚く、これを待遇せり。彼等は居ること三四個月にして去り、更に、又他の白人の來るあり。旅行者と稱し、商賣人と稱し、道者となり、乞丐となり、一去一來、その足蹤を絶たざること、二年ばかり、皆、土人の厚遇を受けて、還れり。あゝ、何等の奸黠ぞ。土人が、情を掛けし、彼等は、悉く、軍人なりき。彼等は、地理を探り、事情を知悉せる曉に、そ

藩屏 家垣す  
轉 保護 云々  
乞丐

奸黠  
リ 悪オチ有ん  
ワルカシクキニト

の恩人に向つて、銃砲を向くる兵隊となりて、この土に再來せり。而して、終に、王國を占領したるなりき。聞けば、楞迦錫蘭嶋も、かくして、占有せられ、緬甸も、亦、かくして、彼等の有となりと。西藏人の、彼等を恐るゝ、亦、宜ならずや。

一一、ヒマラヤ紀行その二

二十六日午前二時半、馬の用意既に、成れりと聞き、蒼黃、食を終へて、庭前に出づ。ダイジリンより東南六哩、ダイガーヒルと稱する地あり。最高峰エベレストは、この地に至りて、始めて、壯容を見るを得べし。旭日、遙に、印度洋頭に出でて、この世界至高の大山脈を照すは、天下無比の大觀と稱せらる。今

蒼黃 困章

や、數時間の後、この景に接するかと思へば、恰も、絶世の大偉人に謁せむとする時の如き、一種、異様の感に打たれぬ。

馬は、徐々として、その深さ、その廣さ、共に、測るべからざる大溪谷に向へる、山腹の石徑を辿る。下弦の月、密雲に隠れて、天地森寂、只、蹄聲の憂々として、太古の森林に反響するを聞くのみ。我等の騎せる馬は、西藏駒と稱するもの、體の小なるに似ず、無比の健馬にして、崎嶇たる山道に馴れ、よく、一萬九千呎の高處まで、雪を踏みて、登り去るといふ。平生、騎行に慣れざる我は、馬の、岩石に蹶く毎に、馬背より投げ出されむとして、屢、心膽を寒うせり。五時、タイガーヒルに達す。

この地、近きは二三十哩、遠きは百哩、四方、唯、大山脈の、限な

百呎、千呎、  
千呎、千呎、  
のまの、千呎、  
崎嶇、を

く、連れるを見る、唯、東南の一角のみ、やゝ、低くして、打ち開けたり。

この一大バナラマ中に收めらるゝ連嶺、一萬呎以上のもの二十五、その、二萬呎以上のもの十にして、エベレストは、西方にあり、キンチンジャンガは、北方にあり。千山萬嶽、この兩大峰の中間、及び、前後を點綴す。

天、將に、曙ならむとす。白雲、徐々に、山脚に收り、連山、悉く、天を摩する一大黒塊たり。忽ち見る、當面のキンチンジャンガその絶巔、紫色に變じ、一道の紫光、吾人の眼を眩せむとするを。蓋し、ベンガル大平原の地平線に出でたる旭光の、まづ、その頂を照せるなり。その時、山は、その上部は、紫色なるが、中間

は、なほ黒塊、下部は、白雲の大海なり。暫くにして、上部の紫は、淡紅に、腰部の黒塊は、紫となり、又暫くにして、淡紅は、琥珀、又は、黄金色となり、紫色は、淡紅に變じ、遂に、全山、紅色を帯びたる銀世界となる。一秒、又一秒、一分、又一分、日、愈、出、て、て、變化、愈、甚しく、距離の遠近に隨ひ、峰より峰、山脈より山脈に、その變化の傳り行きて、赤きもの、紫なるもの、金の如きもの、銀の如きもの、一時に、眼界に映じ來る。連嶺、悉く、旭光に浴せる時、猶背後に一大黒峰の、屹然として、立てるを見る。蓋し、これ、百七哩の距離を有せるエベレスト峰の、猶、太陽を迎へざるが爲なり。待つこと、數分時、紫金の光輝數條、エベレストの頂より、爛として、群山を照す。この時、連峰、悉く、紅色となりて、獨、エベ

レストの紫なるを見るのみ。

あゝ、壯嚴か。雄麗か。この時、この際、人は、たゞ、恍然として、一種、異様の感に打たれ、その景、その情と共に、言慮の外にあり。到底筆舌の形容を許さざるところ、恐くは、千古の大詩人が、畢生の心血を注ぐとも、この、宇宙無比の大觀に對しては、その萬分の一をも描出し難からむ。

恍惚として、立つこと、一時餘、われと同じく、この景に對し、只、時々、嘆聲を漏し居たる男女八名の英人は、この時、世界第一の高山と、この絶大なる壯觀とに接したる喜に堪へずとて、タイガーヘルの頂上に、舞蹈を始めぬ。世界探險に據る。

## 一一一、地勢と國民の性格その一

太陽の地平線より昇りて、再び地平線に没するを仰ぐべき地方の住民は、如何なる性格を有するか。又、月の山の端より出でて、同じく山の端に入るを望むべき地方の住民は、又如何なる性格を備ふるか。はた、彼此の間、差異なかるべきか。これを、實際に徴するに、かれは、地勢の、壯大廣遠なるが爲、その間に養はれたる性質も、亦、れのづから、豁達にして、その抱懷は、世界併呑四海蕩平の如き、絶大なる壯圖を畫き來るを、常とすれども、これは、眼界の、狹隘なるが爲、人心も、亦、れのづから、内部に局し、その理想は、一小局には徹底すれども、遠大なる雄志を缺くを、常とす。故に、かれは、實行の民にして、こ

れは、理想の民なり。かれの、得意とする所は、遠征雄略なれども、これの嗜好は、専ら、文藝、技術に趨き易し。かれは、彪大粗笨にして、これは、精細緻密なり。かれの、古昔に於ける代表民には、蒙古平原を馳驅せし韃靼人あり。現今に於いては、サーマチ、ク廣原を席卷せし、スラブ人あり。又、これの代表民には、ピンドス山に圍まれたる、古の希臘人あり。アペニン山脈に横ぎられたる、今の羅馬人あり。

古來、平原國民の經營せし遺蹟と、山陵國民の建設せし遺業とを比較せば、著しく、その差異を發見するならむ。他の例は、姑く措き、今、まづ、人生經營のあととなる、地圖上の彩色に就いて、これを觀よ。地勢の規模、壯大なる亞細亞洲と、地形の構



成、區々たる歐羅巴洲とは、その邦國の區劃に於いて、いづれか大に、又、いづれか小なる。亞細亞は、面積二百六十三萬方里を有する、絶大なる洲なれども、その區劃は、十六區に過ぎず。これに反して、歐羅巴は、面積六十六萬方里にして、國を列するもの、實に、二十國なり。故に、亞洲の一區は、平均十六萬十方里なれども、歐洲の一區は、三萬三千方里、即ち、亞洲の約五分の一に過ぎず。れよそ、邦國の區劃は、人類經營の範圍を表すものなれば、邦國の大區たるものは、その住民經營の大、言ひ換ふれば、遠征壯圖に富める人民の住地たるを表し、小なるは、その反對なる人民の住地たるを示すものと謂はざるべからず。これを以て、何が故に、サーマチック平原に、粗大なる露

西亞帝國あるか、北米大平原に、大陸を横斷する合衆大共和國の存するか、はた又、中央亞細亞に、大蒙古あり、南米中央の低原に、廣大なる巴西國あるかは、既に、余の解釋を竣たずして、必ず、明ならむ。

果して、然らば、我が日本國は、如何。我が國は、既に、知られたる如く、到る處、翠巒、黛の如くに亘り、青螺、崢嶸として聳え、風光明媚、實に、一幅の畫圖に異らずと雖も、その地勢は、即ち、所謂、山國なり。既に、山國なり。これに加ふるに、又、嶋國なることを回想せざるべからず。我が國民の資質、れよそ、ト知するに難からざるべし。我が習俗の、優美にして、美術に長ずるは、國土風景の、然らしむる所なるべく、志かも、勇壯の氣象を具へ、

崢嶸、高嶺、峻嶒

ト知

ト知

敵愾  
敵愾猶奮ルナリ  
敵愾恨怒スナリ  
故王恨を思リキ  
上虞の地見ヤリ

その思慮は深くして、周密に、學術を好み、技藝に巧緻なるは、山國の致す所なるべし。又、敵愾の氣、熾にして、愛國心深く、一旦、事あるに臨みては、外に對して、團結甚だ固く、慨然、身を以て、郷土を衛る風あるは、嶋國たるに由らずんばあらず。かくの如きは、日本國民が、その邦土、その地勢より感受する、貴重なる特質にして、これを以て、今日の尊榮を保ち、又、これを以て、現今の繁盛を來せり。然れども、裏面より、これを觀察すれば、我が國民の弱點も、亦、國土地勢に感應せることを省慮せざるべからず。

嶋帝國の地勢を見よ、如何に、その構造の規模の、小なるか、我が國土は、僅に、崑崙山系、及び、樺太山系構成の餘波として、

紹介せらるゝにあらずや。國內の山脈は、馬背を分つが如く、國中の河流は、溪水に異らず。その平原は、猫額大にして、その湖沼は、一掬の池水なり。試に思へ、我輩が、八千、八水と稱する信濃河は、その長程に於いて、ボルガ河の七分の一にして、黄河の十二分の一なり。又、十七條の信濃川を延長するにあらずれば、ミスシッピー河に及ばず。若し、揚子江を、我が國に移せば、正に、千嶋に發源して、臺灣に注ぐべし。その上流の重慶港を、根室とすれば、河口に近き上海は、基隆なり。又、我輩が、月に入るべき山もなしといふなる、關八州の平原は、その廣袤に於いて、支那平原の、百二十分の一にして、露西亞平原の、百三十五分の一なり。なほ、北米ミスシッピー流域は、日本全土に、七

倍し、南米平原は、日本全土に、二十二倍するを回想すれば、如何に、嶋國規模の、狭小なるに驚かざるを得むや。

而して、我が國民は、數千年來、この間に生まれ、この間に養はれ、又、この間に死する人なり。その國民氣質の、一種の偏癖、即ち、嶋國的根性を帯び、萬事萬端、すべての規模、狭小にして、雄遠、壯大の氣なき、亦、無理ならずと謂ふべし。例へば、内に、政治の得失を争へども、對外の政策を講ずるに迂なり。政黨の流派は、多く、内政によりて岐れ、貿易主義、人種問題によるにあらず。その農業とは、毛氈を敷き、蓆を展べたるが如き、掌大なる田圃にして、省勞の器機を使用する大農法にあらず。その商業とは、國人間の共商賣にして、世界萬國を、花主とする

ものにあらず。その工業とは、小刀細工に近くして、大規模の機關を使用すること、なほ、遍からず。その航海とは、嶋國附近の渡船にして、大洋航行を主とするもの、また、多からず。その旅行とは、箱根、日光、須磨、舞子にして、未開地の探検、大陸横斷、世界周遊にあらず。雛形的の機場を有するも、實業家にして、十哩の鐵道を敷設するも、また、實業家なり。

一三、地勢と國民の性格との二

故に、我が國民の、大といふ觀念に至りては、比較的、小なるを知るべく、酷に、これを極言すれば、大といふ觀念は、全然、皆無なるや、<sup>か</sup>も知るべからず。茫漠たる千里の廣野とは、關東

括弧の動詞  
第四段  
か  
あり  
疑  
同  
チ  
用  
マ  
キ  
リ

平原にして、洋々たる大河とは、信濃河ならむ、奈良の大佛は、古往今來の大像なり。一千萬の資本あれば、日本第一の大銀行なり。百艘の船を有すれば、無雙の大汽船會社なり。日本第一の大富豪とは、幾何の富を有するか。日本第一の大建築とは、如何なる大厦なるか。日本の大學者、日本の大著述、果して如何。天然、既に、彼の如し。人事、あに、獨、かくの如くならざるを得むや。

更に、その嗜好に於いても、むしろ、箱庭的の泉石を愛すれども、却つて、天空海濶の大風致を賞する者尠し。只、彈丸黒子の郷土に、戀々として、足跡、嶋地の外に出でず。放散移殖の途なきを以て、すべての小なるに似ず、唯一つ、大陸各地に勝り

て、多大なるものは、人口、これなり。即ち、二萬七千方里の邦土に、既に、四千二百萬あり。その密度は、將來、愈、甚しきを加へむとす。その結果や、人民の經營と、土地の生産との、平衡を得ず、下層の活路は、日に、困難を訴へ、見苦しき勞働に服する者、その數を増しぬ。これ、忘かしながら、自然の結果、と謂ふ外なからむも、小嶋國人たる者、大に、省みる所なかるべからず。

以上、余は、嶋國自然の規模、狹小にして、箱庭的なること、その間に生ずる人事の規模も、亦、狹小にして、雛形的なることを説きて、いまだ、海國の、大に、天然の殊遇を受け、發達の性質を備ふることを説かざりき。抑も、人は、陸に棲み、陸上に經營すと雖も、その、大に、利用し得べきものは、海なり。水なり。水土

には、移動自在の海城を築くことを得べく、水生動植の産は、地産物と競うて、餘あり。特に、海面の茫渺際涯なきは、蒙古平原、サーマチック平原、はた、亞米利加平原の比にあらず。而して、その交通は、山岳、邱陵、河湖、森林の障礙あることなく、東にも、西にも、前後左右、自由自在にして、何物も、これを妨ぐるることなし。故に、古來、交通史に、一大革命を興へ、世界の有様を一變せしめたる程の傑物は、必ず、海國人にあり。上古、希臘、羅馬の海國が、文化の種子を播きたるは、言ふも、更なり、始めて、東洋と西洋との交路を開き、東西兩洋諸邦に、大革命を加へたる者は、ベネチア海市の一男子、マルコポロにあらずや。喜望峯廻航の新航路を開きて、世界に、大洋航行の模範を示し、しも

のは、イベリヤ半島の端に住みしバスコ、ダ、ガマにあらずや。又、亞米利加大發見の功を全うして、一新世界を加へたる者は、ジノバ海府の出身なるコロンブスにあらずや。はた、地球を一週して、一大平面なる世界と思へりし迷夢を破り、その實際に、圓體なることを證せしは、葡萄牙のマガリ、エンズにあらずや。更に、又た、世界を三週航して、いたるところの未知嶋、不毛地、武陵桃源を、世に紹介せし人は、英國のクックにあらずや。

かくの如く、海國に、有數なる豪傑、冒險家、遠征者、探檢家等をいだし、全く、その地勢に産せられたる者なり。海國に住する人は、茫淼たる海を望む毎に、この水の彼岸は、果して、何

四級は  
佐々  
うん 佐々  
あつた  
り

處ぞ、これを横斷すれば、如何なる所かあるなどいふ感念は、常に、その腦裏に往來す。加ふるに、朝に、錨を揚げて、彼に駛る船を視、夕に、帆を孕みて、これに來る船を望み、爲に、愈、遠航冒險の志を鼓舞せられ、多年一日、遂に、その企望を、實にせるものなり。

然らば、我が海國に、れいては、如何。古來、我が天然は、常に、國民を驅りて、この境遇に導けり。彼の山田長政の如き、或は、天竺德兵衛の如き、又、濱田彌兵衛の如き、少くとも、世界的觀念を有せし小コロンブス、小マガリ、マンスを産せざりしには、あらざりき。これをして、天然の示導に一任せしめなば、大コロンブス、大マガリ、エンスを産せしや、知るべし。只、或政治的

抑壓は、これが天然を掩ひ、遂に、處女的陋習を馴致せしこそ、返す返すも、遺憾なれ。然れども、一たび、その抑壓を去り、その陋習を破るに、れいては、地勢に感應し、指導せらるゝ、天然の特質は、あに、發揮せずして、止むべけむや。我が國民は、今、正に、その第一階を履める者なり。我が海國男子たる者は、水を、相手とする覺悟なかるべからず。我が海國人たる者は、常に、海を顧みざるべからず。矢津昌永著地理學小品

#### 一四、平泉

十一日、瑞巖寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して、入唐、歸朝の後、開山す。その後、雲居禪師の徳化に依

りて、七堂、豊改りて、金碧の壯嚴、光を耀し、佛土成就の大伽藍  
とはなれり、けり。

十二日、平泉へと心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞き  
傳へて、人稀に、雉兔、藟蕘の往きかふ道、そこも分かず、遂に、  
路踏みたがへて、石の巻といふ湊に出づ。黄金花咲くと、詠み  
て、奉りけむ金華山、海上に見渡され、數百の廻船、入江につど  
ひ、人家、地を争ひて、竈の煙立ち續きたり。思ひかけず、かゝる  
所にも來れるかなど、宿、憊らむとすれど、更に、かす人なし。漸  
く、まどしき小家に、一夜をあかして、明くれば、復、知らぬ道迷  
ひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まゝの萱原など、よそ目に見  
て、遙なる隄を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩と云ふ所に

一宿して、平泉に到る。その間、廿餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀、一睡の中にして、大門の址は、一里こなたにあ  
り。秀衡が館の墟は、田野になりて、金鷄山のみ、形を遺せり。ま  
づ、高館にのほれば、北上川、南部より流るゝ大河なり。衣川は、  
和泉が城をめぐりて、高館の下にて、大河に落ち入る。泰衡等  
が舊蹟は、衣が關を隔てて、南部口をさし固め、夷を防ぐと見  
えたり。さて、義臣すぐつて、この城に籠り、功名、一時の叢と  
なりぬ。國破れて、山河あり。城春にして、草青みたり」と、笠打ち  
敷きて、時の移るまで、涙を落しぬ。

夏草や、つはものどもが夢のあと。  
かねて、耳驚したる二堂開帳す。經堂は、三將の像を遺して、

（手書き）  
三將の像を遺して、  
經堂は、三將の像を遺して、  
かねて、耳驚したる二堂開帳す。  
夏草や、つはものどもが夢のあと。  
かねて、耳驚したる二堂開帳す。

光堂は、三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散り失せて、珠の扉、風にやぶれ、黄金の柱、霜雪に朽ちて、既に、頽廢空虚の叢となるべきを、四面、新に圍み、藁を覆ひて、風雨を凌ぎ、暫時、千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや、光堂。

(松尾桃青著奥の細道)

一五、荒野の末

○

石川 依平

ものゝふの、いのちを露と、あらしそひし、

あらし野の末に、あきかぜぞふく。

○

加納 諸平

笠置山、あすの志ぐれを、さきだてて、

みだるゝ雲に、あらしふくなり。

○

飯田 年平

こしこかたは、どほくかすみて、春草の、

青野がはらに、きあすすなくなり。

○

土岐 光秋

ふき下さす、木の葉も見えて、俱利伽羅の、

山かげさむき、ゆふあらしかな。

○

山田 百枝

こゝをせせど、たちあらしひし、武士の、

その名ながるゝ、うぢの川なみ。



一六、すざろごとそざろごと五篇

一、雪の朝

雪のれもまろろ降りたりしあした、人のがり静いふべき事ありて、文を遣るとして、雪のこと、何ともいはざりし返事に、「この雪、いかが見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからむ人の仰せらるゝ事、聞き入るべきかは感動詞かへすがへす、くちをしき御心なり」といひたりしこそをかしかりしか。今は、なき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。徒然草

二、青き眼

かり、あり、か、り、と、成、り、そ、る、故、人、と、え、り、文、字、連、絡、す、る、時、の、流、れ、を、説、き、あり、さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬ事なり。用あ

一筆名詞  
のちまかせ  
九行と一般  
ぬ、打ぬ、動詞  
第四段連体法

ひじ  
り名詞ト名詞ヲ  
連絡トルテニオハ  
ひかえし  
形名詞ト二級  
形名詞ト二級  
副詞法

人  
名詞  
一般連体法  
テニオハ

法  
既テ二級連用  
法  
詞変、受身助動  
詞変、尊敬性ト  
一般連用  
体世  
事、名詞  
開、カ行四段流  
動詞ト二級  
入、ラ行下二段

りて、行きたりども、その事果てなば、とく、歸るべし。久しく、居たる、いとむづかし。人と對ひたれば、詞も多く、身もくたびれ、心も、静ならず、よろづの事障りて、時を移す、互の爲、益なし。いとほしげにいはむもわろし、心づきなき事あらむ折は、なかなか、その由をいひてむ。同じ心に對はまほしく思はむ人の、つれづれにて、今志ばし、今日は、心静になど、いはむは、この限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、たれもあるべき事なり。その事となきに、人のきたりて、のどかに、物語して、歸りぬる、いとよし。又、文も、久しく、聞えさせねば、などばかり、いひれこせたる、いと嬉し。徒然草

三、過ぎにし方

靜に、れもへば、よろづ過ぎにし方の戀ひしさのみぞ、せむ方なき。人志づまりて後、長き夜のすさびに、何となき具足取りまた、め、のこし置かじとれもふ反古などやり棄つる中に、なき人の手習ひ、繪かきすさびたる、見出でたるこそ、たゞ、そのをりのこゝちすれ。この頃ある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけむと思ふは、あはれなるぞかし。徒然草

四、賤しげなる物

賤しげなるもの。居たるあたりに、調度の多き、硯に筆の多き、持佛堂に、佛の多き、前裁に、石、草木の多き、人にあひて、詞の多き、願文に、作善、多く、書き載せたる。多くて、見苦しからぬは、

調度。牛道具  
前裁。庭  
作善。神に願ひて  
しものか  
はれは  
多き願文に

文車の文、塵塚のちり。徒然草

五、見ぬ世の友

ひとり、燈火の下に、文をひろげて、見ぬ世の人を、友とするこそ、こよなう、慰むわざなれ。文は、文選のあはれなる卷々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この國の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなる事多かり。徒然草

こよなう(意此上)  
文選。五那具考  
あはれありい

一七、文話一則

喜を敘するに、喜しといひ、悲を敘するに、悲しといふは、文の上乗にあらず。喜しといはずして、れのづから、喜を感じしめ、悲しといはずして、れのづから、悲を感じしむ、文の妙、こゝ

にあり。曩に、或人が、近松門左衛門の逸事を記せるを讀むに、  
近松、嘗て、淨瑠璃を論じ、あはれといふ時は、含蓄の意なくし  
て、その情うすし。あはれなりといはずして、れのづから、あは  
れなるが、緊要なり」といへり。まことに、與に、文をかたるべき  
人なり。

されども、なにが故に、悲喜をいはずして、悲喜を感ぜしむ  
るか。その理の由るところを究めずば、いまだ、これを立てて、  
作文の原則とはなしがたからむ。れもふに、これ、一に、讀者の  
心が、これを會得するにあたりて、直に、その意味をつまびら  
かにし得ると、纔に、その意味を推し測りて止むとの差違あ  
るが故なり。すなはち、一は、具體的にして、一は、抽象的なるが

之れは、さきと何ん  
つとせん、かゝるや  
をよとゆたかかん  
月ひまほし

ゆゑなり。

たとへば、たゞ、悲といへば、生別の悲も、死別の悲も、貧寒の  
悲も、みな、悲なり。さらに、進みて、考ふれば、れなじ生別にも、朋  
友の生別あり、親戚の生別あり。れなじ朋友の生別にも、われ  
往くあり、かれ往くあり。かくの如くにしてゆかば、その悲の  
事情と場合とは、千萬、きはまりあるべからず。千萬無窮の事  
情と場合とは、只、一の悲といふ抽象的の詞によりて、想像す  
べからざるや、明なり。されば、今、單に、生別の悲といふ時は、た  
だ、漠然として、生別の悲をれしはかり思ふのみ。その狀況、晦  
暝にして、明ならず、その感も、隨ひて、淺し。さるに、もし、楠公櫻  
井驛の事を讀まば、一の悲字なくとも、既に、心動きて、禁ぜざ

るものあらむ。これ、その文、具體的にして、その事情と場合と、一目の下に、瞭々として、心に上り來り、その生別の、死別たり、悲の、哀たる意味、たゞちに、讀者に、つまびらかなればなり。必ずしも、外より、悲しといはずして、讀者が、内に、みづから、悲を、れこせばなり。

蓋し、悲しといひ、喜しといふがとき、詞は、歸結の詞にして、その歸結に達するまでには、これに達する次第あるべし。その次第を措きて、たゞ、歸結のみ擧ぐるは、議論するものが、その是非の理由を細示することを懈りて、ひとり、是なり、非なりとのみ叫ぶに、れなじ。誰か、耳を傾くるものあらむ。故に、能文の士は、その歸結を後にして、まづ、その次第を敘するこ

眞率にして

神韻神韻

高直高直に風度に風度けたかきけたかき様子様子

とに、力を用ゐるなり。

われ、平生、白石の折たく柴の記を讀み、その文、眞率にして、志かも、神韻ゆたかなるに服せり。その乃父が、その主の、蘆澤某を、手づから、誅せむと怒れるを、諫止せる事を敘して、また、宣ひ出すこともなく、われも、また、申し候ふこともなくて、侍ふほどに、やゝありて、面に、蚊の集りぬるに、逐ふべしと、宣ひしほどに、面を動しければ、血に飽きて、胡頹子の如くになりし蚊の、六つ七つ、はらはらと、地に落ちしを、懐の紙を取り出して、包みて、袖にして侍ふ。といふがごとき、實に、三昧に入れり。もし、歸結をいふに、急にして、

君も、うち案じ居たまひしに、やうやうと、色和ぎ給ひぬ。われは、ひたすらに、君の御面のみ伺ひをり、れのれの面に、蚊の集りぬるも覺えず。

などせば、**索然**として、人を動すこと、その半にもれよぶ能はざらむか。森田文藏

ソウゼン  
索然  
趣味、之、事

### 一八、白石と宣長

白石の没せしは、享保十年にして、宣長の生まれしは、享保十五年なり。即ち、僅に、六年を隔てて、この二偉人は、遂に、相知ることを得ざりしなり。余は、今こゝに、二偉人といへり。れもふに、徳川氏三百年の治世を通じて、偉大なる人物を、わが學

界の上に求めば、この二人を措きて、他に、また、その人なかるべきなり。まかして、この二偉人の間に存する、著しき類似と、甚しき差異とは、特に、考究すべき、興味ある問題なるべし。

白石は、漢學者にして、宣長の、國學を以て立ちし事と同じならず。されど、白石は、主客の別を辨へざる漢學者にはあらずして、常に、漢文が、我が國語の發達を妨げたるを論じて、大に、これを悲めり。これ、よく、宣長の、漢意を排斥したると似たるにあらずや。更に、その事業の、多面多趣なりしに至りては、余は、兩者の間に、その著しき類似のものあるを認めずばあらず。綿密なる財政家として、敏腕なる外交家として、はた、卓絶せる歴史家として、文章家として、詩人として、さては、西洋學

立ちし  
一行四段、  
段重用法  
過、去、助、動、詞、  
段重用法  
川、次、の、動、詞、  
川、次、の、動、詞、  
川、次、の、動、詞、

の鼻祖として、卓見なる語學者として、れどろくべき、多才多能なる白石は、皇學及び神道を中心としたる、すぐれたる神學者として、歴史家として、更に、非凡なる語學者として、詩人として、文學批評家としての宣長と、雙々、相對して、共に、わが學界に、千古不滅の異彩を放てるにあらずや。夫かも、この二偉人を比較して、ことに、余の、いひ難き趣味を感ずるは、その一面に、れいて、かく、著しき類似を示せるにかゝはらず、また、他の一面に、れいて、その、甚しき差異をあらはせること、これなり。

白石は、峻嚴、秋霜の如き人なりき。夫かして、宣長は、溫厚、まことに、春風の如き人なりき。一は、廟堂に立ち、堂々の議をな

白石は、峻嚴、秋霜の如き人なりき。夫かして、宣長は、溫厚、まことに、春風の如き人なりき。

白石は、峻嚴、秋霜の如き人なりき。夫かして、宣長は、溫厚、まことに、春風の如き人なりき。



石白井新と長宣居本

して、君の忌諱に觸るゝを辭せず。一は、世の外に、庵を結び、鈴を鳴して、從容自適す。この性格の差異、むしろ、驚くべきにあらずや。その他、白石が、弟子を有せざりしに反して、宣長は、全國に弟子を有し、六十六國の中、弟子のなき國は、僅に、二國のみなりきといへる、白石は、政治上の偉能ありたるに反して、宣長は、その上に、何等の才能をあらはさざりしが如き、皆、その差異の甚しきを

見るべきなり。

更に進みて、これをその學問の上に見よ。兩者は、ひとしく、博學多能なりしかども、その學風に至りては、また、頗る、異なるものあるにあらずや。即ち、白石は、事物の實質に立ち入りて、創始を喜び、啓發を事とせるに、宣長は、考證を基とし、既成の事物の綜合をつとめ、組織を念と志たるにあらずや。試に、讀史餘論を見よ、東雅を見よ、東音譜を見よ、よく、前人を抜きたる、白石の創始的才能は、明に、これを認むることを得べし。更に、去つて、古事記傳を見よ、玉の緒を見よ、三音考を見よ、前代及び、同時代の學問を統一したる、宣長の偉大なる手腕は、よく、これを、詳にすることを得べし。白石は、また、理を本とし、

啓發 啓發

綜合 綜合

三音考  
漢音 漢音  
吳音 吳音  
唐音 唐音  
行 行  
明 明

宣長は、また、信仰を本とせり。一は、科學者なり。一は、或意味に於いて、宗教家なり。かれは、韓語、梵語、宋元の音、西南洋の蕃語が、我が國語の中に進入したるを説き、これは、鼻音を排し、半濁音を説きて、濁濁なる外國音の、清純なる、我が國音を侵す能はざるを説けり。白石は、また、實地の日本にむかはむとし、宣長は、また、理想の世界に進み入らむとす。一たび、白石の書を讀みて、轉じて、宣長の書に對すれば、何人か、よく、その徑庭の甚しきに驚かざるものあらむ。

志かして、その生涯の徑路の、更に、また、大なる差異を示せるに至りては、まことに、一奇といはざるべからず。土屋侯の一足輕の子として、はやく、人を驚しし幼年時代と、失意に滿

甲府  
堀田  
筑後守  
徳川二代將軍

ちたる中年時代とを送りて、やがて堀田甲府の二侯に仕へ、忽にして天下の大事に參與し、榮譽寵遇を極めたりしが、六十一歳の時、時勢の變に遇ひ、一朝にして、榮辱地をかへ、寂しく、晩年を送りたる白石と、幸福なる木綿問屋の子として、十分なる普通教育をうけ、書を好むが故に、醫を學ばしめられ、紀州侯の奥殿に奉仕して、靜に、好學の心を養ひ、二男三女を擁して、遂に、山室山に、千歳の春を樂める宣長とを比較すれば、驚くべき境遇の差異の、うたゝ、人をして、いひ難き感懷にうたれしむるものあるにあらずや。志かして、一は、伊勢の如き、平和の地に生まれて、優然として、學の研究に従ひ、一は、江戸の如き、混亂の渦中に投じて、奮然として、世と闘へるは、ま

た以て、その差異の、偶然にあらざるを見るべきなり。

白石と宣長とが、性格、境遇の差異、かくの如く、大なるものあり。されど、わが學界の偉人たるにいたりては、まことに、軒輕すべからざるものあり。これをや、天才の偉人の、その兩極端にむかひて、遺憾なく、發達したる一好例といふべからむ。

(上田萬年著國語のため)

### 一九、文學の價值

文學は、その範圍、きはめて、廣くして、そのうち、或は、智識を開發し、或は、徳行を獎勵するを、目的とするものありと雖も、純粹なる美文學に對ひて、その用不用を論ずるは、全く、謬見



に屬す。吾人が用不用といふは、もと何か、一定の目的ありて、これに達するに適するや否やの意に過ぎず。汽車、汽船の類は、人生有用のものなり。これ、運搬、もしくは、行旅の目的を達する最好方便なればなり。工學、農學等も、また、人生有用のものなり。これ、吾人の目的に達せむとする方便に關する學科なればなり。すべて、吾人が有用とするものは、目的そのものにつきて、いふにあらずして、目的に達する方便につきて、いふことなり。有用とは、何かに、有用なるを意味す。その何かは、目的に、外ならざるなり。然るに、美文學は、目的そのものなり。吾人は、美文學によりて、一種、高尚なる精神上の快樂を享くるを得。かくのごとき、精神上の快樂を享くるは、已に、目的に

達したる證なり。これを、方便として、また、他の目的に達せむとするにあらず。これが、即ち、終局の目的なり。この故に、美文學の用不用を論ずるは、もと、意味なきことなり。

春天、日、あたゝかにして、櫻花爛漫たる時、いかに、市民があらそひいでて、これを賞翫するか。その、これを賞翫するは、これを、方便として、なにか、また、他の目的に達せむとするにあらず。櫻花を賞翫して、精神上の快樂を享くるは、これ、その目的なり。あに、また、櫻花の用不用をいふべけむや。もし、單に、口腹の利益のみを冀はば、櫻花のごとき、すべて、わが、日本國の美を成すものは、これを伐りつくして、薪炭となし、そのかはりに、菽麥を植うるに如くは、なかるべきなり。文學の、社會に

れける、なほ、花の、自然界にれけるが如く、吾人、精神上の快樂を増進するものにして、いかなる國土にありとも、多少、精神上の發達をなしたる以上は、これを要せざるなし。もし、これなしとせば、その社會は、いかに、落莫の感に堪へざらむ。人類は、日々、夜々、マチを造り、シヤボンをつくり、汗を流し、肉を疲らし、悲哀困苦、以て、一生を送り得べきものにあらず。たとひ、かくの如くにして、一生を送り得べしとすとも、そは、決して、高尚なる生活とはいふ能はざらむ。果して、然らば、文學の、社會にれける價值、問はずして、知るべきなり。

試に、眼を宇内に放ちて、これを見よ、ホメロス、ダンテ、シェクスピア、ゲーテ等無數の文學者を、歐洲文化の歴史より、抹殺

し去らば、その光彩をうしなふこと、蓋し、又、甚しかるべし。荒れはてたる野園の中にも、數點の菊花あれば、もはや、幾多の興味を添ふるにあらずや。たゞ、一箇の蓮花すら、泥水の池をして、風趣饒からしむるにあらずや。文學が、いかに、國家の裝飾をなすか、これを知らざるものは、まことに、青盲ならむのみ。(井上哲次郎)

## 二〇、海と日本文學その一

わが邦は、四圍皆海にして、繁華殷富なる都市も、また、海岸にれほく、從ひて、人口の分布も、いにしへより、海岸にれいて、稠密なりしこと疑ふべからず。されば、わが邦の人民は、れの

づから、海と相離るべからざる直接間接の關係、少からず。これによりて、考ふるに、わが邦の文學も、また、れのづから、海に少からざる關係を有つべき理なり。たとへば、潮來り、潮去る、れもしろさを詠める歌、または、晴れたる日の、親むべく、風起てる日の、れそるべき海原のさまを記しし文、或は、また、浪の果よりのぼる日のうるはしさ、嶋山のあなたに落つる月のあはれさなどを寫ししもの、いさましき舟子がうへを傳へたる小説などは、わが邦の文學に、いと、多く、見ゆべき理ならずや。  
さるに さるに、事實はいたく、これに反せり。所謂、和歌といふものには、海に關するもの、甚だ少し、たまたま、これなきにあらず

延に五年

といへども、れほくは、海をれそれ、海を厭へるが如きものにして、海中に立てる國民の歌としては、ふさはしからぬこととやいはむ。試に、古今集以後の勅選の歌集、また、一家の歌集の類を、手にして、漁夫、舟人の類を詠める歌をあらため見よ、その世わたりのあやふきを悲み憐める歌のみ多く、かの、萬里の海を、わが家にして、八方の風を驅使する舟子の意氣を詠める歌、または、千尋の波の底より、吞舟の大魚を得て、舷頭に、ひとり嘯く、漁夫の樂を描ける歌の如きは、いくばくもあらざらむ。

小説は、竹取物語、源氏物語の昔より、海としいへば、怖るべきもののやうに描けるが多し。風にあひて、舟の破るゝこと、

又は、思はぬ方に吹き流さるゝことなどは、好みて描けることとなるが、その物語は、大かた、皆、机の上にて、作者が海に對する、自己の恐怖心より捻<sup>ひね</sup>り出したるもののみ。一も、まことらしき状態を描きて、海上の光景を、讀者に感ぜしめたるものなきなり。されば、これ等の物語は、兒女子をして、海の畏るべきことを、空想上に、深く、思はしむる外には、何の結果をも遺すことなし。古來の小説少からずといへども、海員の生活、船中の旅客の眞情等を書きあらはししものの如きは、殆ど、あらざるなり。余は、實に、ある一章にすら、海に關する記事の、やや、屬目を値すべきものを含めるをさし示す能はざるなり。謠曲、淨瑠璃も、また、然り。作者が、海に對する恐怖心の外には、

なまじりたけつゝ  
いふこととほん  
おどろき  
おどろき  
おどろき

何事も見いだし得べきものはなしといふも、不可なきに似たり。もしも、強ひて、これありとせば、そは、海神、龍王等に對する迷信の事實ならむのみ。

一一、海と日本文學その二

翻つて、考ふるに、わが邦と海との地理上の關係に、文學の相應せざることは、實に、甚しけれど、これによりて、直に、わが邦の歌人、小説家、れよび、謠曲、淨瑠璃の作者等を、思想、偏僻なり、眼孔、狭小なり、技倆拙劣なりとすべからず。いかにとなれば、その邦の文學は、その邦の地理に相應して、發達繁榮すべきものなると共に、また、實に、その邦の歴史に相應して、發達

繁榮すべきものなればなり。されば、わが邦と海との地理上の關係を考ふるとく、わが邦と海との、歴史上の關係をも、また考へずば、我が邦の文學を論ずるに於いて、その判断の中正を得ざるべきなり。さて、わが邦と海との、歴史上の關係は、如何。

かの徳川氏は、大船を造ることを禁じ、海外諸國と交通することを欲せざりしにあらずや。陸上の交通、驛傳の諸法は、甚だ整理せられしにかゝはらず、海上の交通、舟運の利は輕視せられて、豪膽なる商人等の經營の外には、政府も、士人も、殆ど指を、海事に染めず、諸侯の參勤交替のごときも、皆、必ず、その陸路を取りしごときは、最近、三百年の歴史にあらずや。

舟子は、志州の鳥羽より、豆州の下田にいたる航路を、非常なる難關と思ひ、旅客は、中國諸港より、讚州多度津にいたる短距離の航海を、大冒険のごとく畏れ、一般の人民は、大罪人と舟子との外には、海を、龍神、海坊主、船幽靈等の巢窟と信じたりしは、徳川氏が、わが邦民をして、壺中の天地に遊樂せしめし政治の結果にあらずや。かくのごとき歴史上の状態によりて、考ふる時は、わが邦の文學と海との關係は、地理上には相應せざるも、實に、よく、歴史上には相應せりといふべきなり。

また、徳川氏以前に於いては、足利氏が、京都に據りたる、桓武帝が、山城の山間に、都を定め給ひたる、猶、その以前に於いて

ても、大和の地に、都を定められたる等は、いちじるしく、わが邦の文學をして、海と相遠ざからしめたりといふべきにあらずや。元祿以前の、わが邦の文學は、國民の文學といはむよりも、むしろ、貴族の文學といふべきものなれば、その國都の、海邊を離れて、山間に置かるゝに至りしは、實に、都府の住者たる貴族をして、海に遠ざからしめ、隨ひて、また、我が邦の文學をして、海に遠ざかるに至らしめたる大原因なりといふべきにあらずや。

二二二、海と日本文學その三

かくの如くにして、奈良、京都の文學者、即ち、わが邦の文學

の父たり、母たる位置に立てる文學者よりして、海といへば、須磨、明石、もしくは、和歌の浦の外は知らぬがごとき、智識、感情を相承せしを以て、その兒孫たる文學者の、今にいたるまで、海に關する篇什の、なにな一つ、わが邦の文學史を飾るに足るべきものをいださざるも、敢て、あやしむに足らずとやいはむ。

都の、大和にありし間、遣唐使といふものの存せしは、萬葉集をして、聊か、古今集よりも、海に關する歌の包含を多からしめたり。古今集を讀み了へて、溯りて、萬葉集を讀まば、その集の作者等が、かの集の作者等より、海といふものに、またしきことは、何人といへども、認め得るところならむ。これ、また、

海に對しては、わが邦の文學が、わが邦の歴史に相應せる一證なり。

萬葉集以前は、載籍甚だ乏しければ、吾人をして、精細確實なる斷案を下す能はざらしむれども、古今集を抛ちて、萬葉集に就けるが如くに、萬葉集を讀み了へて、古事記、日本書紀に見えたる傳説、歌謠を見る時は、吾人は、海國の民として、ここに、一種の愉快を感じ、わが邦の上古の文學は、歴史上にも、地理上にも、よく、相應して、わが祖先等が、海に對する思想、感情、及び、智識の、決して、萎縮的ならざりしことを知るなり。

わが邦の地理上の状態は、わが邦の文學をして、海に去たしましむべき因をなせり。去かるに、歴史上の状態は、上世を

除きては、わが邦の文學をして、海に遠ざからしむべき因をなせり。かくの如くして、わが邦の文學は、海國の文學としては、甚だ、相應せざる状態をあらはすにいたれり。されども、これ、實に、歴史上の關係の壓迫によるものにして、わが邦人、本來の性質、海洋に對して、怯懦なるにあらざ、また、わが邦の歌客文人の、思想の偏僻、眼孔の狹小、技倆の拙劣なるより、かくの如くなれるにあらざるは、歴史の繫縛束縛を被らざりし時代の人の手になれる記紀をよみても、明なることなり。

海中に、國をなせる、わが邦人に、吞海の氣象なくば、いかで、世界に、勇を稱するを得む。地理上の状態は、千古かはらず、歴史上の状態は、雲煙去來す。今や、わが邦は、山間のせまき平地

に、やすきを偷みしが如き、昔日の愚をば、二度せず、日に、月に、海に親むこと多くなれり。海國の所産たるに相應する文學は、蓋し、今日以後に成らむか。幸田成行著 譚言

### 一二三、 河流

#### 一、 上流

河水の源を出づる、その初は、晶明清冽にして、涓々として、荆棘榛莽の間を潜り、正に、これ、

ひゞきくる、松の嵐にうづもれて、

たえまがちなる、谷のみづれと。

の景致あり。既にして、砂動き、礫鳴り、潺湲として、自然の琴を

彈じ、巖石に隨ひて、屈折する際、這般の小流、左より到り、右より來り、十澗百溪、湊注して、水、漸く嵩み、かつや、上流地方は、水蒸氣凝縮し、降雨も、亦、頻々なるを以て、水、愈多く、勢、益猛く、地面の傾斜、急劇なると共に、激瀨奔湍、巨巖を衝き、亂石を轉し、砂を率ゐ、礫を驅り、恣に、所在の土壤を浸蝕して、自己の所領を擴げ、且、兩岸の巖石の罅隙に滲入し、更に、内部より穿鑿して、遂に、河道を作る。これを、上流の大勢とす。

岩に、堅緻なるあり、脆軟なるあり。脆軟なるものは、流水のこれを浸蝕すること、容易なれば、河道、隨つて、廣大なれども、堅緻なるものは、これのづから、狹窄なり。去かして、上流の水は、畢竟、巨大なる鋸のごとく、その職責は、河道を鑿ち、かつ、擴ぐ



るにあるのみ。沙泥を沈澱堆積するが如きは、些も顧る所にあらず。謂ふなかれ、上流の能事は、破壊のみと克く、破壊の業を成就せずんば、如何ぞ、中流、下流に、建設の行爲あらむや。況や、こゝに、飛瀑あり、そこに、急瀬あり、疊湍ありて、水の氣韻、眞個に生動するを覺ゆるをや。水の酷だ、愛すべきは、實に、上流にありとす。

### 二、中流

河、方に、亂峯の間を去りて、たまたま、丘陵の地に出づるや、河底の傾斜、やうやう少く、河幅も、亦、太まるを以て、流勢、れのづから、緩漫となり、浸蝕も、甚だ、猛烈ならず。谿開けて、炊煙、まゝ起り、時に、鷄犬の聲を聞き、輕舟、上下して、次第に、人間に近

づくを知る。古人が、山舒、水緩、有土田の句、これ、中流所在を描ける好個の措辭たり。けだし、中流の特色は、汎濫ある毎に、沙泥を、兩岸に沈澱堆積し、層々、階段の如きものを疊み成して、いはゆる、段丘を構成するにあり。これは、本洲の河流には見ること少けれども、北海道の大川には、多く、これあるを認む。要するに、中流の職責は、河道を擴ぐると同時に、土壤を浸蝕し、かつ、堆積し、破壊と建設と、相衡平するに在り。而して、段丘地は、實に、高地と低地との中庸物たり。

### 三、下流

河、既に、丘陵地を去るや、土地の傾斜、愈、平板となり、河幅、益、太まり、流勢も、亦、れのづから、緩漫を極め、遂に、土壤を浸蝕せ

ず、唯、上流、中流より傳送せる沙泥を沈澱堆積するに過ぎず。既に、然り、下流の職責は、専ら、土壤を沈澱堆積し、以て、新陸地を經營するにあり。要は、全然、建設的なるものなり。されば、自然の景象も、亦、悠々として、渺茫たる江面には、煙波掩映し、岸遠く、山、更に遠く、所在の田畝、頻に開け、かつ、河道は、下流に趨くに隨ひて、常に、大なる弧を畫きて、曲折せり。

春色駘蕩の候に至れば、麥苗、菜花の間に、風帆を認め、翠色、黄色、白色の繡錯するを見、霜氣の、秋に横る節來れば、白蘋、紅蓼、うたゝ、人を動し、鮭魚潑瀨として、網に上り、荻花、雪の如きあたり、時に、鴻雁の下るを見るべし。下流の、酷だ、愛すべきは、その平和なるところにあり。その優長なるところにあり。縹

渺として、畫の如きところにあり。志賀重昂著河及湖澤

二四、菜の花

○

菜の花や、このあたりまで、大内裏

黒柳 召波

○

桃つらつら、花つくる處、水ながし

久村 曉臺

○

春の海、日ねもすのたり、のたり哉

谷口 蕪村

○

れは原や、蝶の出で舞ふ、れぼる月

内藤 丈草

○ 水澄みて、もみの芽あをし、苗代田。

渡邊支考

○ ほろほろと、山吹散るか、瀧のれと。

松尾桃青

一一五、清盛入道

世にもあはれなるは、平家とぞいふめる。げに、この一門の盛衰を考ふるに、心も、詞も及びがたきなり。

案ずれば、一旦の榮華に耽りて、百年の計を思はず、今や、秋の嵐の吹き荒ばむずる朝も、春の夜の夢、なほ、臆にして、覺めての後は、さすがに、うき世と觀ずれども、先世、後代、既に、梭を

かへたるを、いかに、かすべき。今を、昔にかへさむすべも、かた糸のよりくづれたる世こそ、かへすがへすも、是非なけれ。

されば、風雅にかくれては、一題の遺詠に、今生の本懐を終へ、恩愛にほだされては、三身の現在に、來世の果報をれもはず。あはれは、桐の一葉に散りそめて、世は、どこしへの秋とぞ見えにける。れもへば、あやしきまでに、あはれなりける運命かな。

さるにても、入道相國の生涯こそ、なかなか、れもしろかりけれ。

弓矢のいさをし、はや、畢んぬ。朝家の權柄、今は、た、盛なり。一門、殿上にのぼりて、六十餘人、私封、全國にわたりて、三十餘州、

攝籙の家は、名のみにて、四海の成敗、みな、こゝに集れり。むかしは、殿上の交をだに嫌はれし人、今は、この人ならては、人にあらじと唱へられ、三百の禿童は、路に往反すれども、京師の長吏、これが爲に、目をそばだつるばかりなり。されば、十善の帝王、かしこくも、外戚の威にれされ給ひて、一とせ、八幡、賀茂の御幸は、八重の潮路の巖嶋とぞ觸れられける。なにがしの卿が、入る日をも招きかへさむずる勢と、書かれしも、げに、こゝとわりと覺ゆ。

不敵なる入道は、私門の榮に飽き足らで、世に、人もなげにふるまはれけるこそゆゝしけれ。こゝに、卿相雲客、流離の難に遇ふもの四十餘人、法皇の御身を以てしても、城南の離宮

に、射山の嵐を去のばせ給ふ。中にも、重代の帝座、俄に、動きて、愛宕の里のあはれをどゞめけるこそ、なかなか、淺ましかりしか。

咲きも残らず、散りも初めぬ、櫻花、嵐なくとも、かくてやはやむべき。一朝、東關、急を傳へて、西風、漸く、競はず。大將軍權亮少將維盛、赤地の錦の直垂に、萌黄匂の鎧著て、連錢蘆毛の馬に、金覆輪の鞍置かせたる容儀、帶佩こそ、あつばれ、平門隨一の貴公子と見えしかど、富士川の水鳥に、算を亂しし十萬餘騎は、徒に、長き世の笑をどゞめたるに過ぎず。加ふるに、北土、俄に、雲亂れて、木曾の山氣、漸く、都に逼り、兩山の衆徒、また、既に、反覆の色を、あめしぬ。平家の運命、日に、ますます、急なり。

時しも、入道は、病にかゝりぬ。あはれ、病の床のさびしきに、霜夜の鐘の響の、枕に沈む時、安藝守の昔より、太政入道の今に至るまで、六十四年の生涯を、靜に、憶ひ出でし時、去かして、命の際の身ぞと觀ぜし時、彼果して、如何の感慨をか催しけむ。一代の榮華、身にあまりて、保平のいさをし、また、いふに足らずと思はざりしか。れのれにつらかりし人々を、かくまでに惱ししことの、罪深かりきとは思はざりしか。幾度か、帝座を驚し奉りしはては、軍兵を擁して、法皇を幽閉しまゐらせしことの中にも、非道の所行なりしを思はざりしか。更に、小松の内府が、身命にかへて、乃父の罪業を救はむとせし、至孝の情に想ひ到りて、恩愛のきづなに、うたゝ、悔恨の心を動す

ことなかりしか。佛門に歸依して、入道と呼びなせる身の、今や、六慾煩惱の絆を離れむずる大事のきはに、今生の名利を棄てて、未來の淨樂を欣求する一念を發することなかりしか。皆、あらず。入道は、死に至るまで、その初念を翻す事なく、まさに、その、生けるが如くにして、死したりしなり。

今はの詞にいはく、兵衛佐賴朝が首を見ざりつるこそ、かへすがへすも、遺憾なれ。われ、死したりとて、佛事孝養をもすべからず、堂塔をも建つべからず。いそぎ、討手を下し、かれが首を刎ねて、わが墓前に懸けよ。これぞ、われに對しての、今生、後生の孝養にては、あらむずる」と。一念の執著に、必衰の運命をも、のともせず、三世の因果を、身にひくとも、なほ、怨敵に報

いむことを必せり。その事の可否は、去ばらく措き、とまれかくまれ、丈夫たる心の強きは感すべきなり。たとひ、四海の波を翻して、かれが頭にかくとも、なほ、この一我を、いかにともすること能はざらむ。六尺の眇軀、こゝに至れば、天地の大にも比ぶべく、運命、われに在いて、浮塵にひとしからむ。いはゆる、死して、去かして、生くるものといふべきか。高山林次郎

### 一一六、 人臣の道

れよそ、王土に生まれて、忠をいたし、命をすつるは、人臣の道なり。必ず、これを、身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵し、その迹を憫びて、賞せらるゝは、君の御政なり。

下として、きほひ争ひ申すべきには、あらぬにや。まして、させる功なくして、過分の望をいたすこと、みづから、危むるはしなれど、前車の轍を見る事は、誠に、ありがたき習なり。けむかし。中頃までも、人の、さのみ、豪強なるをば、戒められき。豪強になりぬれば、必ず、驕る心あり。果して、身を滅し、家を失ふためしなれば、戒められしも、ことわりなり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の、源平の家に屬する事をどゞむべし」といふ制符、たびたび、ありき。源平、久しく、武をとりて、仕へしかども、事ある時は、宣旨を賜りて、諸國の兵を召し具しけるに、近代となりて、やがて、かたらはるゝ輩、多くなりしによりて、この制符は下されしなり。果して、今までの亂世の基なれば、いひがひ

なき事になりけり。

この頃よりのことわざには、一度軍にかけあひ、或は家子、  
郎從、節に死ぬるたぐひもあれば、「わが功にれきては、日本國  
を賜へ、もしは、半國を賜るとも足るべからず」などぞ、申すめ  
る。誠に、さまで思ふ事はあらしなれど、やがて、これより亂る  
るはしともなり、又、朝家のかろがるしさもれし量らるゝも  
のなり。言語は、君子の樞機なり」といへり。あからさまにも、君  
を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬ事にこそ。堅き氷は、  
霜を履むより至るならひなれば、亂臣賊子といふものは、そ  
のはじめ、心詞を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふ  
とまうすは、日月の光の變るにもあらず、草木の色の改るに

もあらず。人の心の悪しくなり行くを、末世とはいへるにや。  
昔、許由といふ人は、帝堯の國を傳へむとありしを聞きて、潁  
川に、耳を洗ひき。巢父は、これを聞きて、この水をだにきたな  
がりて、渡らざりき。その人、五臟六腑のかはるにはあらし、能  
く、思ひならはせる故にこそあらめ。

なほ、行末の人の心、思ひやるこそあさましけれ。大かた、れ  
のれ一身は、恩に誇るとも、萬人の怨を遺すべき事をば、など  
か顧みざらむ。君は、萬姓の主にてましませば、限ある地をも  
ちて、限なき人に、頼たせ給はむ事は、推しても量り奉るべし。  
もし、一國づつを望まば、六十六人にて、皆、ふさがりなむ。一郡  
づつといふとも、日本は、五百九十四郡こそあれ、五百九十四

人は悦ぶとも、千萬の人はよろこばじ。況や、日本の半を心ざし、皆ながら、望まば、帝王は、いつくを去らせ給ふべきにか。かかる心の萌して、言葉にもいだし、面にも羞づる色のなきを、謀反のはじめとはいふべきなり。將門は、比叡山に登りて、大内を遠見して、謀反を思ひ企てけるも、かゝる類にやありけむ。昔は、人の正しくて、將門に見も懲り、聞きも懲りけむを、今は、人々の心、かくのみなりにたれば、この世は、いよいよ、衰へぬるにや。

漢の高祖の、天下を取りしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これを、三傑といふ。萬人に勝れたるを、傑といふとぞ。中にも、張良は、高祖の師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを、

千里の外に決するは、この人なり」と、宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて、すこしきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣、多く、ほろびしかど、張良は、身を全くしたりき。近き代の事ぞかし、頼朝の時までも、文治の頃にや、奥の泰衡を追討せしに、みづから、向ふことありしに、平重忠が、先陣にて、その功勝れたりければ、五十四郡の中、いつくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、極めたる、すくなき所を望み賜りけりとぞ。これは、人に、ひろく、賞をも行はしめむがためにや。賢かりけるをのこにこそ。又、直實といひける者に、一所を與へ給ふ下文に、「日本第一の剛の者なり」と、書きて、賜ひてけり。一とせ、かの下文をもちて、奏聞する人のありける



が、褒美の詞の甚しきに、與へたる所のすくなきまことに、名を重くして、利を軽くしける、いみじき事」と、口々に、譽めあへりけり。いかに、心得て、譽めけむと、いどをか。これまでの心こそなからめ、事に觸れて、君をれとし奉り、身を高くする輩のみ、れほくなれり。ありし世の東國の風儀もかはりはてぬ。公家のふるき姿もなし。いかになりぬる世にかと歎くともがらもありと聞えき。神皇正統記

二七、大塔宮熊野落

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞き召されむために、暫く、南都の般若寺に忍びて、御座ありけるが、笠置の、己に、

落ちて、主上囚れさせ給ひぬと聞えしかば、虎の尾を履むれそれ、御身の上に薄りて、天地廣しと雖も、御身ををさめらるべき所なし。日月、明なりと雖も、長夜に迷へる心地して、晝は、野原の草に隠れて、露に臥す鶉の床に、御涙を争ひ、夜は、孤村の辻に、くみて、人を咎むる里の犬に、御心を惱され、何處とて、も、御心安かるべき所なかりければ、かくても、暫時はと思し召されける所に、一乘院の候人、按察法眼好專、いかがして、聞きたりけむ、五百餘騎を率して、未明に、般若寺へぞ寄せたりける。折節、宮に付き奉りたる人、一人もなかりければ、一防ふせぎて、落ちさせ給ふべきやうもなかりける上、透間もなく、兵、既に、寺内にうち入りければ、紛れて、御出あるべき方もな

し。さらば、よし、自殺せむと思し召して、既に、れし、膚脱がせ給ひたりけるが、事協はざらむ期に臨みて、腹を切らむことは、いと、易かるべし。もしやと、隠れて見ばやと思し召し反して、佛殿の方を御覽するに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃、三つあり。二つの櫃は、いまだ、蓋を開けず、一つの櫃は、御經を、半過ぎ、取り出して、蓋をもせざりけり。この蓋を開けたる櫃のうちへ、御身を縮めて、伏させ給ひ、その上に、御經を引きかづきて、隱形の咒を、御心の中に唱へて、それはしける。もし、搜し出されなば、やがて、突き立てむと思し召して、氷の如くなる刀を抜きて、御腹に指し當て、兵、「こゝにこそ」と、いはむずる一言を待たせ給ひける御心の中、推し量るも、尙、淺かる

べし。さる程に、兵、佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上まで



も、残る所なく搜しけるが、餘に、求めかねて、「これ體の物こそ怪しけれ、あの、大般若の櫃を開きて見よ」とて、蓋したる櫃、二つを開きて、御經を取り出し、底を翻して、見けれども

れはせず。蓋開けたる櫃は見るまでもなしとて、兵、皆、寺中を出で去りぬ。宮は、不思議の御命を續がせ給ひ、夢に、道行く心

地して、猶櫃の中にれはしけるが、もしまた兵立ちかへり、委しく、捜す事もやあらむずらむと、御思案ありて、やがて、前に、兵の捜し見たりつる櫃に入り替らせ給ひて、それはしける。案の如く、兵共、また、佛殿にたちかへり、前に、蓋の開けたるを見ざりつるが、覺束なしとて、御經を、皆、うち移して見けるが、からからと、うち笑ひて、大般若の櫃の中を、よく、捜したれば、大塔宮は、いらせ給はて、大唐の玄奘三藏こそ、それはしけれと、戯れければ、兵、皆、一同に、笑ひて、門外へぞ出でにける。

かくては、南都邊の御隱家も、かなひ難ければ、乃ち、般若寺を、御出ありて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には、光林坊玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河坊、武藏坊、村

續文

上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎、彼此、以上、九人なり。宮を始め奉りて、御供の者までも、皆、柿の衣に、笈を掛け、頭巾、眉半にせめ、その中に、年長せるを、先達に作り立て、田舎山伏の、熊野參詣する體に、ぞ見せたりける。この君も、とより、龍樓鳳闕の内に、長らせ給ひて、華軒香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩の長途は、定めて、協はせ給はじと、御伴の人々、かねて、心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ、習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮、脚巾、草鞋を召して、少しも、草臥たる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行き逢ひける道者も、勸修を積める先達も、見咎むる事なかりけり。由良の湊を見渡せば、澳漕

ぐ船の櫂をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌、吹上をよそに見て、月に登ける玉津嶋、光も今はさらでだに、長汀曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨を含める孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。

その夜は、叢祠の露に、御袖をかたしきて、通夜、祈り申させ給ひけるは、傳へ承る、兩所權現は、これ、伊弉諾、伊弉册の應作なり。わが君、その苗裔として、今朝日、忽に、浮雲のために隠されて、冥闇たり。あに、いたましからずや。玄鑿、むなしきに似たり。神、若し、神たらば、君、何ぞ、君たらざる」と、五體を、地に投げて、

一心に、誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應、などかあらざらむと、神慮も、暗に、測られたり、終夜の禮拜、御窮屈ありければ、御肱を曲げて、枕として、暫く、御目睡ありける御夢に、鬢結ひたる童子、一人來て、熊野三山の間は、なほも、人の心、不和にして、大義成りがたし。これより、十津河の方へ、御渡り候ひて、時の至らむを、御待ち候へかし。兩所權現より、案内者に附けまゐらせられて候へば、御道指南仕るべく候ふ」と、申すと、御覽せられ、御夢は、則ち、覺めにけり。これ、權現の御告なりけりと、たのもしく思し召されければ、未明に、御悅の奉幣を捧げ、頓て、十津河を尋ねてぞ分け入らせ給ひける。その道の程、三十餘里が間には、絶えて、里人もなかりけ

れば、或は、高峯の雲に、枕を欹て、苔の筵に、袖を敷き、或は、岩漏る水に、渴を忍びて、朽ちたる橋に、肝を消す。山路もとより、雨なくして、空翠、常に、衣を濕す。見上ぐれば、萬仞の青壁、刀に削り、見れるせば、千丈の碧潭、藍に染めり。數日の間、かゝる嶮難を經させ給へば、御身もくたびれはてて、流るゝ汗、水のごとし。御足は、缺け損じて、草鞋、皆、血に染れり。御伴の人々も、その身、鐵石にあらざれば、皆々、飢ゑ疲れて、はかばかしくも、歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手をひきて、路の程十三日に、十津河へぞ著かせ給ひける。太平記

雑記

二二八

國家國體政體及び憲法

四月三日、今日は、神武天皇祭なり。朝、とく、起き出でて、見れば、天氣清朗、空に、一點の雲もなし。まづ、書齋を掃き清め、床に、御製の御歌志るせる軸を掛け、その前に、御酒御饌を供へて、拜みまつりぬ。

午前のほどは、神武の御紀など繕きて、心靜に讀み居しが、午後よりは、學生一人來、二人來て、はては、七八人になれり。今日のこととて、談は、忽ち、國家といふことになりしが、遂には、國體、政體、または、憲法などいふ議論にさへなれり。めづらしと思ひて、聞き居しに、議論は、さまざまにわかれて、いつ、果つべくもあらず。

余、人々にむかひ、諸子のいひあへることは、まことによし。

たゞ、國家、國體、政體、または、憲法といふことを、一わたり、知りて、後にせよ。さなくば、空論の謗やあらむ」といへば、「さらば、われらの爲に、それらの事どもを説き聞かせ給へ」といふ。今日の御祭にはふさはしき話と思へば、いなみもやらで、説きはじめぬ。

一、國家とは、如何。

こゝに、統治權といふものあり。主權ともいひて、國土、國民を統べ治むる力をいふ。この統治權の及ぶ區域を、版圖とも、領地とも、又は、領土とも、國土ともいふ。この統治權の支配を受くる人を、臣民といひ、その國に屬する臣民を、國民といふ。

れよそ、力あれば、力を發する本體あるものなり。統治權は、一國を統べ治むる公力にして、この公力を發する本體を、國家といふ。例をあげて、いはむか、かりに、花を見、月をながめむと、れほくの人の、某の場所に集りたりとせよ、かくては、たゞ、某の場所に、れほくの人のあつまりといふまでにして、一家とも、一團體ともいひがたきなり。そは、これを統一し、これに、指揮、命令を發するものなければなり。一國の事も、また、かくの如し。たゞ、一定の地域を限りて、多數の人員が、そこに生活すればとて、これを統べ、これを治むる公力、すなはち、統治權ありて、自主自宰の生存をなさざるかぎりは、いかでか、これを、名づけて、國家といふことを得む。

されば、統治權ありて、國土國民を統一し、内を治め、外に交る、これ、國家の國家たる所以なり。

諸子、會得せしや、否や。

一、國體とは、如何。政體とは、如何。

國體に、種々の區別あり。されど、君主國、民主國、君民同治國の三を、そのれもなるものとす。たゞ一人の君主が、統治權を掌握するは、君主國なり。國民のすべてが、一團をなして、統治權を掌握するは、民主國なり。共和國といふも、これなり。君主と國民とが、ひとつになりて、統治權を掌握するは、君民同治國なり。要するに、國體は、統治權の所在の如何によりて、その區別の生ずるなり。

政體にも、また、種々の區別あり。されど、專制政體、立憲政體の二を、そのれもなるものとす。統治權の細別なる、立法、行政、司法の三權を、一人の手に行ふは、專制政治なり。その三權をわかちて、議會、政府、裁判所等の機關をして、これを行はしむるは、立憲政體なり。要するに、政體は、統治の方法の如何によりて、その區別の生ずるなり。

國體と政體との區別は、かくの如し。されば、國體、れなじくして、政體の異なることあり。政體、れなじくして、國體の異なることあり。わが日本、れよび、支那、朝鮮、露西亞の如きは、唯ひとりの君主を戴くがゆゑに、國體は、ともに、君主國なり。されど、わが日本にては、議會、政府、裁判所等の機關をなはり、

立法權、行政權、司法權の運用を分掌するがゆゑに、政體は、立憲制なり。支那、朝鮮、露西亞にては、この統治權の運用、たゞひとりの君主の手に存するがゆゑに、政體は、專制々なり。また、獨逸、佛蘭西、亞米利加、英吉利にては、いづれも、議會、政府、裁判所等の機關ありて、政體の立憲制なるは、わが日本にれなじけれど、獨逸にては、たゞひとりの君主、統治權を掌握し、佛蘭西、亞米利加にては、國民、これを掌握し、英吉利にては、君主と議會と、これを掌握するがゆゑに、國體をいへば、獨逸は、君主國、佛蘭西、亞米利加は、民主國、英吉利は、君民同治國なり。

諸子、會得せしや、否や。

一、憲法とは、如何。

憲法とは、國體と政體との大綱の定る法則をいふ。統べ治むるものは、たれ。統べ治めらるゝものは、たれ。統治の機關は、なに。統治の方法は、いかに。この四つは、憲法によりて、定るなり。

文につゞりて、一つの法典として、公に示したるを、成文憲法といひ、慣例によりて、定れるを、不成文憲法といふ。國あれば、國體と政體とは、必ず、定るなり。故に、國として、憲法あらざるは、なきなり。たゞ、國によりて、成文の憲法あるものと、不文の憲法あるものとの差あるのみ。されば、立憲國といふを、憲法ある國と解するは、あやまりなり。そは、政體の



名たることは、今改めて、いふまでもなからむ。

わが國にては、明治二十二年二月十一日、憲法を發布せられたりき。されども、これを見て、その以前には、憲法なしとなすべからず。たゞ、この時、成文の憲法を發布せられたりしのみ。不文の憲法は、建國の初より傳りて、去ばらくも、絶滅せざりしなり。成文の憲法を發布せられてよりは、議會は、立法に與り、政府は、行政の任に當り、裁判所は、司法權を行ふなど、統治の機關の權限さだまり、互に、相侵すことを得ざるに至れり。さはいへ、議會も、政府も、裁判所も、共に、統治の機關にして、みづから、統治權を有するにはあらず。統治權は、國の元首たる天皇、これを總攬せさせ給ひ、機關は、

その運用の職に就くのみ。かく、統治の權力、皇位とともに、合體し、皇統連綿として、萬世に亘るなど、宇内、曾て、その例あらざるなり。

諸子、會得せしや、否や。

それより、二三の質問ありしが、余は、各國の歴史によりて、一、その長短得失を論ぜしに、諸子は、やゝ、さとりたりけむ、皆うなづきぬ。

こゝに、御酒御饌をれるして、そをいたゞき、互に、御製の御歌などうたふに、席上、忽ち、春風起りきて、その快、いふべからざるものあり。諸子、辭し去りて後、筆援りて、志るすこと、志かり。(岡田朝太郎著法學雜稿)

再訂中等國語讀本卷八終

明治三十八年十一月十五日再訂改版印刷  
 明治三十八年十一月十八日再訂改版印刷  
 明治三十九年一月十六日再訂第二版印刷  
 明治三十九年一月二十日再訂第二版發行

全十册  
 定價各卷金廿五錢

明治三十三年九月二十二日  
 文部省檢定  
 (中學校國語科用)



著者 故落合直文

相續者 落合直幸

補修者 明治書院編輯部

發行者 三樹一平

印刷者 宮本敦

發行所 販賣所

東京市神田區錦町一丁目  
 (電話本局二四三八番)  
 東京市神田區南乘物町  
 (電話本局八九二番)

明治書院 明治圖書株式會社

